目次

佛教の根本と其の應用（其八）……本多日生
開目鈔講話（第二十七講）……小林一郎
常懷悲感心遂醒悟……故小西日喜
法統擁護の一使命……河合陟明
漢詩……成金子島龍光
保健の要點（承前）……池田龍一
お題目に對する信仰意識……礒部滿
記事
○本部團報　○同心會報　○大日本立正會報
○橫濱法悅協會報　○團費誌料寄附金及維持費領收

第四十四年二月號

3,12 J

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間內ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歷史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其何頭宜傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ願望スル所ナリ

本團畧則

◎目的　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根抵ヲ培養シ立正安國ノ大業ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク指頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ每年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎賛助員　一時金百圓以上又ハ每年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス

◎正團員　一時金參拾圓以上又ハ每年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用

（其八）

本多日生

根本戒

そこで信心から必ず三寶に歸依したる結果と云ふものは善心が現はれ、三歸五戒と云ふものになつて居る。五戒と云ふのは五つであるけれども、これがなか〳〵根本戒と申して一切のものが其處に現はれて來るのである。戒と云ふのは窮屈に考へる人があるけれども、戒めと云ふのは止作と云うて惡を止め善を作すと云ふことである。その止作の止の方に就て五つある、第一は殺生をしてはならぬ、殺生しないと云ふことは慈愛の精神、やさしい所の精神、仁禽獸に及ぶと云ふことになる。けれどもさう初めから面倒は言はず、殺生をしないやう殘酷な事をしないやうにする。それから强盜、泥棒をせぬやうにしなければならぬ。それから婬欲、男女の關係に惑溺してはいけない、性慾を絕對に否認する譯ではない、釋尊は性慾を罪惡とはしない、けれども溺れ易いものである、其處を節制して婬欲に流れないやうにせよと云ふ事を教へる。それから安語、嘘を吐いてはいかぬ。それから飲酒、酒を飲んではいかぬ。

斯う云ふ五つの戒めを垂れられたが、此盜みをしてはいかぬと云ふやうな事も、段々推擴めて行くとこれは矢張り正義の觀念である。姪妖になつてはいかぬと云ふやうな事は禮讓と云ふやうな意味である。妄語してはいかぬと云ふのは信義、飲酒してはいかぬと云ふのは心の亂れを戒めるのであります。心を正しうして居らなければならぬのに酒を飲めば醉ッ拂ふ、醉ッ拂ふのは心が亂れると云ふ事である、自分の心の平和を保つことが出來ない。心をだん〳〵擴げて行つて徹底すれば有らゆる心が出て來るけれども、最初から面倒な事を敎へたものではない、ものゝ憐れを知つて無暗に生物を殺したりするやうな事をせぬが宜しい、盜みをしてはいかぬ、男女の慾に溺れてはいかぬ、嘘を吐いてはいかぬ、酒を飲んではいかぬ、斯う云ふ行ひ易き所よりやらなければならぬ、初めに澤山箇條書ばかり澤山並べて、これからシッカリしろと云うて相談して、二重にも三重にも規則を拵へても守らなければ何もならぬ、一箇條でも朝起なら朝起だけでも日課表を拵へて、何時に起きて何時に飯を喰ふと云ふ規則を作つて實行して行く、澤山書いてそれを皆守れなくなるより、一ッづゝでもそれを能く守つて行く事が宜いのである。

戒と開遮

お釋迦樣は斯樣に三歸五戒と申して、信心の中から戒と云ふものを敎へられる、戒は面倒に言うて居るけれども開遮と云ふことを說かれた、その時と場合とに依つて新しき世の中に處するものはこれを開發し疏通して行かなければならぬ、時代の變遷に依つて不要になるものはこれを廢止してしまはなければならぬと云うて開遮と云ふことを言はれた、我國の佛敎に於ては開遮と云ふ事をしなかつたからして、佛敎の戒律の存するものは非常に固陋なものになつてしまふ。これは佛敎の代表人物に依つて時代を見て戒を開遮して行かなければならぬ、今の日本の佛敎では戒の存するものは非常に窮屈な立法をその儘守らんとし、守らぬと云ふ派は末法無戒と稱して一切戒は無いと云ふのであります、どちらも極端な言ひ方である、さう云ふ事はいかぬ。今日は適當なる立法を定めて行くのである、出來得ないやうな事を無理矢理にやれ、風呂に這入るのに袈裟を卷いて這入らなければならぬ、天竺で云へば袈裟、日本では手拭を卷いて這入つて居るけれども、一人這入る時には手拭も卷かない、人が居ればタオルを卷いて這入るが、それを袈裟を卷いて這入らなければならぬのに平常電車に乘つても袈裟を取つて居ると云ふやうなことを言うて攻擊して居るけれども、さう云ふ攻擊は時勢に適せぬ、電車の中であんなものを着て乘られたら他の乘る者が迷惑し困ることが出來るのであるから、そんなものを着て居る方が罪惡であるかも知れませぬ。さう云ふ戒律に對する固陋な思想と、末法無戒と云うて一切を拋棄して佛法には道德上の敎はないと云ふやうなことを言ふ者とは共に間違つた事であります、先づ適當なる所の立法を考へて行かなければならぬ。

慈悲報恩

そこで今日は佛敎の立法がどう云ふ風になつて行くかと云ふやうな事から十分の考察を要する事なの

でありますが、兎に角佛法は善い事をすると云ふことが信心と同時に必要である、これは五戒として話したからぢやが、これを一つに纏めて云へば善を行ふの心であります、惡を止めて善を行ふの心、さうしてこれを他の方面から云へば報恩の念と申して居ります。佛法は如何なる小さい恩でもこれを報いなければならぬ、小恩尙ほ報ず如何に況んや大恩をやと言ひまして、これがお釋迦樣がいつも說敎せらるる所の問題である。佛敎の信心をする以上は恩義の觀念を忘れてはならぬ、小さなものでも恩を受けた以上はそれに報ゆる事はしなければならぬ、假令僅かに世話になつた事でも、雨の降る時分に傘一本借りた事でも、傘は借りッ放し、その時は有難いと思ふたけれども、返しに行くのが面倒臭いからその儘傘を取つてしまつたと云ふやうな事は甚だ宜くない事である、態々でも傘を返しに行つて、この間は傘を拜借しまして有難うございましたと言うてダリヤの一本も切つて持つて行けば宜い。斯う云ふ風にハッキリと恩義の觀念と云ふものを力說した、如何に況んや大恩をやと云ふ中から四つの大恩を選び出されて、一つには父母の恩、二つには衆生の恩、三つには國王の恩、四つには三寶の恩、更に二大恩を加へて師匠の恩、夫婦の恩と云ふことを言はれるのである、それは實によく說かれて居る。さうして佛敎の道德觀念と云ふものは片務的ではない、報恩と云ふ方は直ぐ一方のやうですけれども、この報恩の觀念が一方に對しては直ぐに慈愛の觀念に現はれて來るのである。恩と云ふものは親と子と云ふ時になれば親は子供に對する慈愛、そこで子供は親に對する報恩と云ふことが起つて來る、一方が慈愛を與へるから一方が恩を感ずる、國王と人民の間でも、國王に慈愛の精神があつて國民はその恩に感ずるのである、そこで慈愛の精神と報恩の精神と云ふものが始終連續して行くので、一人の人間は一面には慈愛の心を持ち一面には報恩の考を持つて行くことになる、これがズッと續いて行くのである。慈愛の考と報恩の考を斯う持つならば、上を向いては報恩の觀念となり、下を向いては慈愛の觀念となる、下に對して慈愛を與ふる事故に茲に又下から行く所の報恩の念がある、斯う云ふ工合に始終慈愛の觀念、報恩の觀念と云ふものを一人の上に持つて居る。さうしてこれが社會を連結して行く、横に考へても同じ關係、縱に考へても同じ關係、そこで人生と云ふものは圓滿に行くことになる、釋尊は左樣に說いた、さうして偏らない樣によく敎へてある、親子の場合でも子が親に孝行をすると云ふだけを說くのではない、親が子を可愛がると云ふ方を屹度說く、この間も子供を賣る親は罰しやうと云ふ法律を決めたらどうかと云ふ報告がありましたが、確にさう云ふ必要が起つて來る、今後は親がその子供を慘酷にすると云ふ事が殖えて來る。生活難が殖えて來る、支那邊りでは子供何かを酷い目に合はせるのを何とも思つて居ない、朝鮮でも然り、朝鮮人を研究して見ると、朝鮮の子供に旨い物を食はすと、向ふの親が出て來て子供の頭を叩いて酷い目に遭はせる、日本では子供にお菓子でも遣つたら、親が出て來て有難うございますと言ふ。さう云ふ道德が頽廢して來ればどうしても親の心得と云ふものも說かなければならぬ、妻の心得だけ說いてはいかぬ。夫の心得も說かなければならぬ。弟子の心得だけ說いてはいかぬ、

師匠の心得も說かなければならぬ、今日は矢張り子弟關係も、師匠の心得も隨分頽廢して居る。主從の關係に就ては唯奉公人だけの道德を說いてはいかぬ、主人の心得を說かなければならぬ、相互的に說く、それをお經に非常に詳しく說かれて居ります。それは悠くり味はつて見たいと思ふ、能くこれ程詳細に考へられたと思ふ程詳しい。

宗教と道德の調和

そこで斯う云ふ思想は阿含にハッキリ出て居りますが、法華經はどうかと云ふと、法華經にはこの事を强く說いて居る。法華の思想は信仰の基礎が智慧にある爲めに、方便品から說いて壽量品に來て居るのである。法華は一面には非常に哲學を持つて居る、法を解釋する上にも、佛を解釋する上にも、總て哲學思想の上に立てられて居る、それは人間の智慧の心を尊敬して居るのである。法華經に於ては人間の智慧と云ふものを否定するのではない、壽量品の中にも『智あらん者、これに疑を生ずる事勿れ』神力品に於ても『この故に智あらん者、この功德の利を聞いて』とあつてこの智慧の心を非常に大切に引いて居る、併しその智慧と云ふものは單純な觀念とか理智とか云ふものではない、信智一體と稱して、その智慧は即ち信心ぢやと云はれる位なものである、ものであるけれども、これは智慧を否定して居るものではない、智慧の內容と一致して居る所の信仰である、この說き方が大切な事である。私が斯う云ふ風に努力して居ることは佛教解釋に於ける一轉機を劃するものである、從來のやうに智慧は智慧、信心は信心、二分されるものでない。西洋の文明は宗教と哲學と二分する、宗教と道德と二分する、其處に文明の缺陷がある、私の研究する事が佛教の原則であるならば、これ程結構な事はないと信ずる。法華經は智慧と信心と結合して居るものである、法華經は智慧と慈悲を一つに現はして居る、これは智慧慈悲と云ふやうに切賣はしない、これは慈悲だけだとは云はない、大智慧大慈悲の完全圓滿なる如來と云ふことをチャンと佛の方に於ても言うて居る、吾々の信心も正しい信心であつて、智慧と云ふものを否定するものではない、その事はお經を讀めば誠に明瞭、又その信心が道德の心を忘れて居るものではない、それ故にお經の中には『大信力、及志願力、諸の善根力』と說かれて、信心と善根力と云ふものは一つに說いてある。或は佛に守られる事と、道德を行ふ事と、正義の團結に加はる事と、慈悲の心、この四つをば法華經で得られると云ふことを說かれる、其處にも守られると云ふことに感謝する精神と、善を行ふ所の道德の精神、信心善心と云ふものは一ッになつて居る。だからして慧心、善心、信心と云ふものが一ッであつて、この三ッを看板にして吾々は進んで居るのである、その信よりして一面には道德性を開發するのである、信は善の源である、慧は信の前提である、譬へて見れば智慧が地所のやうなもの、信心は家を建てゝ居る建設のやうなもの、善はその家屋の中に於て色々の仕事をして居るやうなものである、その地所も立派であるし、建設も立派であるし、仕事も立派である所に於て、或は慧心、信心、善心と云ふものを一括して活躍して居るものである。併しそれはその人の分に應じてやるか

ら分らぬ事が分ると云ふのではないが、落着いて考へて見れば大事な事が分つて居る、分らぬ事はない、分らぬと云ふのは詰らぬ事に引掛るから分らぬ、今お話するやう事柄は、自分が始なく終なく存在して居る、その中に心がある、心の持樣に依つてこの世の人はやつて行ける、そこに佛樣が守つて下さる。その佛はお釋迦樣が中心であると云ふやうな事は、何も難かしい事ではない、それが分らない樣であつたら何も分りはしない、人間一人前の生活を世の中で遂げることは出來はしない、それは自分の產んだ子供の齡も知らないやうな母親もあるからして、そんな者になると面倒か知らぬが、マア自分の子供の名前くらゐ覺えて居るならば今お話することが了解出來ぬ事はない、一遍で分らなければ三遍でも五遍でも大切な事は聞くが宜い、さうして佛敎に依る我慧心と云ふものを維持して居らなければならぬ。これは慧心と云ひますれば七面倒臭き佛法哲學とか、煩瑣な哲學となつて譯の分らぬやうになると云ふことが學問の病、佛敎は世間の學問や他の宗敎で云ふのと違つて大事な敎である、その敎を與へられて其通り心を向けたならば、佛敎に基く慧心であります。さうしてそれが信心であり、信心に依つて善心を活躍せしめて居るものであると云ふことが言へやうと思ふのである。

どうも法華經はさう云ふ精神に現はれて居るし、阿含經もさう云ふ精神になつて居るし、廣く一切經を研究すれば大體その方向に向つて居つて、釋尊は智慧と慈悲とを二分せず、又善を行ふ事を別にしない、一個の佛としての大智慧があり、大慈悲があり、大活動があり、一個の佛敎徒として正しい觀念、

正しい信念、正しい活動を持つて居るものが佛敎だと云ふ事になるやうに思はれる。その程度は餘り面倒を言はず、その人の分に應じて誰でも了解の出來るやうに、その各方面に敎へられた所に佛敎の長所があるのではなからうか、だからそれを一般的に了解せぬと、特別に深い意味に就て細かく了解せぬとの違は、その人の知識の程度に屬するけれども、併し大學者が了解したる佛敎の眞義も、又一般人の考へた眞義も亦同じ物であらうと思ふ。それを非常に詳しくよく心得て說明するか、大體それを意識して居るけれども餘り上手に說けぬとか云ふことに違ひはあらうけれども、大事な所は違はない。又愈々大切な所になつたならばさう面倒な問題は段々無くなつてしまふのである。例へば日本の國體とか、日本の皇室に對する日本國民道德の最高觀念と云ふものになつたならば、大學の博士が心得て居るのも、國民が心得て居るのも同じもので、却つて餘り面倒に解釋して居る博士の方にやり損ひがあつて頭を搔かなければならぬやうな事が起るのではないか。

さう云ふ譯であるからして餘り智慧を臆病がらぬ方が宜からう、吾々國民がもうさう云ふ國體の大切な事を大學の先生に委せてやると云ふ事はいかぬ事で、國民一般誰しも知つて居る、吾々が心得ぬやうな面倒な事は閑な學者にやらして置けば宜いので、吾々七千萬の國民は皆同じやうな國體及び皇室に對する大切な心得は持つて居る。吾々人間が親に對する心得の分らぬと云ふ事はない、孝經の講釋を聽かなければ親に對する孝子の心得の分らぬと云ふ事はない、眞心を以て親に仕へる、その親に仕へる心は

孝經の精神であらねばならぬと云ふ風に一般化した大事な所に宗教の教は行かなければならぬ。さう云ふ意味に於て私は心と云ふこと、さうしてそれが慧心、信心、善心として考へなければならぬと云ふことを申上げました、これをもう一ッ佛樣の方の側から佛の心、それを哲學的、宗教的、道德的に佛と云ふものを眺めて置けば下から上つて行くこの考と一致するのでありますから、上の方の側を略々相似たやうな事であるけれども、それを今度お話し申して、それから應用の方にも移つて行きたいと思ひますが、今日は餘り長くなりますから此講演を終ります。

夫れ老狐は塚を後にせず、白龜は毛寶が恩を報す
畜生すら斯の如し、況や人倫をや。……
佛教を習はん者、父母師匠國恩を忘るべしや。
―日蓮聖人報恩抄―

開目鈔講話（承前）

小林一郎

華嚴宗の澄觀、此義を盜んで華嚴經の心如工畫師の文の神とす。眞言大日經等には二乘作佛・久遠實成・一念三千の法門これなし。善無畏三藏が震旦に來て後、天台の止觀を見て智發し、大日經の心實相・我一切本初の文の神に、天台の一念三千を盜入て眞言宗の肝心として、其上に印と眞言をかざり、法華經と大日經との勝劣を判ずる時、理同事勝の釋をつくれり。

華嚴宗の澄觀といふ者は『此義を盜で』すなはち天台大師の一念三千といふ意味をよく研究して、これを自分の方に應用することを思ひついて、さうして華嚴經の中の言葉を、天台大師の言ふ一念三千といふ說明の仕方に依つて說明をして居る。これは要するに附會である。華嚴經の中には『心は工みなる畫師の如く』であると言つてある、これは確に良い言葉で、畫を描く人が筆を揮つて居ればどんな畫でも出來ると同じやうに、吾々も心の中に尊い佛性があるのだから、常に努めて己まなければどんな事も出來る、斯ういふことであります。

併し吾々が努めて出來ない事がある、或は善い事をしてもその反對に世間に誤解されて迫害を受けたり、脅迫を受けたりすることがある。往々にしてさういふ事に出逢ふのでありますが、さういふ場合に、これ程眞心を以て世の爲め人の爲に盡して居ながら、どうしてこんな迫害を受けるのだ、こんな馬鹿々々しい目に逢ふのだと言つて失望したり、落膽したり、世を呪うたり人を呪うたりするのでは、折角善い事をした甲斐がないでせう。それで若し自分が眞心を以て世の爲め人の爲に盡して、それでも報ひがない、或はそれでも人から迫害を受けるといふ時には、まだ自分の骨折が足らぬのだ、まだこれは自分の努力が十分でないのだ、この世に於ける骨折ではまだ本當ではないのだから、處を變へ世を變へて後の〳〵世までも骨折つて、さうして自分の骨折が世の中の役に立つやうにしたい。又自分の骨折が世の中のお役に立つことに依つて、自分は凡夫の境界から一歩々々進んで菩薩の境界に行きたい、さうして結局は佛の境界にまでも到達したい、斯ういふことを念じなければならぬ譯でせう。要するに自分の努力といふことを離れて善い結果などを求めても出來る事ではない、實際心が本であります。上手な畫師が畫を描くやうに、自分の心の持ち方に依つてどんな大きな事でも出來て行くのでありませう。

何時かも同じ話をしたかと思ひますが、德川時代の末に長州に吉田松陰といふ人があつて、本當に國の將來を憂へて、國のいろ〳〵な制度などを改革する爲に全力を盡したけれども、その努力が世の中に普く現れないで、德川幕府の役人が、吉田松陰といふ者は德川幕府の土臺を搖がす事を謀る者である、世の中の平和を亂す事を謀る者であるといふ風に誤解して、到頭召捕つて江戸に送つて、江戸の小塚原で死刑に處せられてしまつた。吉田松陰としては實に殘念なことであつたらうと思ひます。ところが吉

田松陰が小塚原で死刑に處せられた二日ばかり前に、故郷に遺してあるところの妹に手紙をやつて居る、その手紙の本文は今でも遺つて居りますが、その手紙を讀んで見ると、吉田松陰は少しも不幸も言つて居なければ愚痴も言つて居ないのです。その手紙の中に何と書いてあるかといふと、『至誠未だ足らずして天地を感動せしむること能はず』すなはち自分の眞心が十分であつたならば、人間どころではない、天地も動かすことが出來るだらう、けれども自分の眞心がまだ足らないから、天地を感動せしむること能はずして今日この禍を受けるのである、『恥づべきの至りなり』斯う言つて居る。自分は世の爲め國の爲に力を盡して居る積りだけれども、まだまだ眞心が足りないと見えて天地を感動せしむることも出來なかつた、況して人を感動せしむることも出來ない、その爲に自分は惡い事をして居ない積りだけれども、今この禍ひに逢うて首を斬られるのだ、恥しい事だ、まだ努力が足りないのだと言つて居るのであります。私はこの吉田松陰の手紙を讀んで思はず涙を流しました、斯ういふやうな心持があつて本當に世の中の役に立つのです。普通の人ならば少しばかり骨折つてその報ひが來ないと、愚痴を言つたり不平を言つたりする。世の爲め人の爲に力を盡して殺されるといふ場合に、至誠未だ足らずして天地を感動せしむることが出來ない、恥しいことだと言つて死んで行つたといふことは、實にこれは尊いことです。吾々はこれ程までには行かないけれども、これに近いくらゐな心持を持つたならば、吾吾はどんな境遇の中でも立派に通つて行けるに相違ない。又その世間に及ぼすところの感化の力といふものは、非常に偉大なものになつて行くに違ひないのであります。實際これは心の持ち方が大事である、心の持ち方が大事であると共に、その心の中には賤しい煩惱もあれば尊い佛性もあるのだから、そ

の尊い佛性を發揮せしむることに全力を打込まなければならぬといふことは考へられる。その尊い佛性を發揮する爲に佛を信ずるのであるが、その佛といふものが法華經壽量品以外に於てまだ十分に說き現はされて居ないのだから、折角の信心が徹底的のものにならないのであります。

さういふことをよくこゝに言つてあるのです。眞言の方の大日經などは、成程大日如來といふことは說いてあるけれども、前に申した『二乘作佛』どんな人間でも佛に成るといふことや、或は『久遠實成』といふ、佛樣が遠い昔からの佛であるといふこと、或は又『一念三千』、どんな凡夫であつても修行の仕方に依つては佛に成るといふやうな敎が一向說かれて居ない。だからどうも眞言のやうな敎だけを信じて居つたのでは、本當の意味の信仰といふことが出來ないのである。併ながら眞言宗の方の人々でも、深く考へれば氣の附くことである。

それで眞言宗を初めて支那に弘めましたところの善無畏三藏といふ人が支那に來て、天台大師の書かれました『摩訶止觀』といふ本を見ると、成程これは尤もだ、これより以上の敎はないだらうと思つて、それでこれに依つて『智發し』自分の智慧が本當に開けて來て、どうもこれ以上のものはないけれども、自分達は眞言宗を弘めることに力を盡して居るのだから、今更この眞言宗の敎義を捨てゝしまふ譯にも行かない、斯う考へた末に、大日經の中に、『心實相』といふことがあり、又『我は一切の本初なり』といふことがある、この文章を天台大師の書いた一念三千といふ說に應用して、世間の人々が納得の行くやうに說明して居る。この心の實相を知るといふことは勿論大事なことであります。自分の心の本當の相を知らなければいけません、自分の心の中を顧みると、屢々申すやうに尊い佛性もあれば、又賤しい煩惱もある。その佛性を如何にして養つて

大きくすべきか、その煩惱を如何にして抑へてしまふべきかといふことが解らなければ、信仰といふことは無意味になるのでございますから、そこで心の實相を知るといふことも勿論必要であります。それから我は一切の本初といふことは、これは大日如來の言葉であります。大日如來といふ佛樣の力が現れて一切のものとなり、一切のものの繁昌して行く本となるのだから、我は一切の本初だ、斯ういふことを言つて居る。たゞ大日經の中にはそれだけの事を言つてある、これよりモット深い事は言つてない。それを今の善無畏三藏といふ人が解釋する時に當つて、天台大師の仰しやつた一念三千といふことを自分の方に應用して、さうして眞言宗の一番大事なものとして居る。さうして眞言宗に於てはそれより以上に、印を結ぶとか、眞言を唱へるとかいふことをやるのである。それで法華經を主にする天台宗と、大日經を依經とするところの眞言宗とでは同じ價値ではない、斯ういふことを言つて居るのであります。

これは皆さんも一通り聽いて居らつしやるだらうと思ふのですが、一體佛樣のお相を見ますと、お顏は似て居るけれども手の形が違ひます、お顏の方は三十二相揃つて居るといふのですから、大概どの佛樣でも菩薩でも似たやうに見えます、併し手の置き方が違ふ。私は佛蘭西の巴里に少しの間居たことがありますが、その時分或る日本の相當有力な人と一緒にルアーヴルの博物館を見に行きました、あの博物館には東洋の部類もありまして、觀音樣だのお釋迦樣だのいろ〳〵の像などを飾つて居る。其處へ行つたところがその人が『君は佛敎の事を大分やつて居るさうだから聞くが、この觀音樣は佛樣ではないのか』斯う言ふのです、『イヤそれは佛樣ではないのだ、菩薩ナンダヨ』と言つたら、『あゝさうだつてネエ、不思議だネエ、この間佛蘭西の或人を自分が案內して來てこの佛像を見せた時に、これは皆佛

だョと言つたら、イヤさうではないョ、觀音といふのは佛ではなくて菩薩の筈だと言つて居つた、西洋人の癖に餘計な事を言ふと思つたけれども、やはり向ふの言ふことが本當だつたかナア、併し觀音樣でもお釋迦樣でも大概同じやうな顏をして居るではないか、どうして違ふのだ』斯ういふことを言つて居りました。西洋人は勿論でありますが、日本人でさへ佛と菩薩の見分けがつかない人が多いのでありますから、況して西洋人には分らないのは仕方がない譯でありませうが、兎に角お顏を見ますと三十二相が皆揃つて居るといふのでありまして、お釋迦樣も阿彌陀樣も皆似たやうに見える。ところが手の形が皆違ひます、又悉く手の置き場所が違ふのであります。それはどうして違ふかと、それが所謂『印相』であります、成程佛樣は絕對の慈悲を具へて居らつしやるのだから、一切の人間をお救ひになるには違ひない、併し世の中の人間の生活狀態といふものが場合に依つて違ふのだから、お救ひになると言つてもどうしてお救ひになるか、そのお救ひになる仕方はその場合々々に依つて違ふ譯であります。それでその佛樣が斯ういふ風にして世の中を救つてやりたいと思召すその心持が現れて、所謂印相といつて手を樣々な形に違へて居る、詰り佛樣のお慈悲の行ひをなさるその方針といふか、その形といふか、さういふものを現はしたものが印相といふものであります。所謂手の結び方です。これは佛樣に依つて皆違ふのであります、阿彌陀樣には阿彌陀樣の印相があり、お釋迦樣にはお釋迦樣の印相があります。それは決して佛樣に優劣がある譯ではありませんけれども、その佛の教を世の中にお說きになりまする仕方が違ひますから、所謂場合に依り人に依つて違ひますから、これを現はしたものが印相といふものであります。

これは何も眞言宗に限つた事ではありません、佛

教全體に於てさういふ事は始終認められて居るのでありますが、眞言宗の方ではそれを土臺にして、吾吾も佛樣に倣つて佛の印相のやうな印を結んで、さうして靜かに考へて居ると、これを賴りとして佛と吾々との心が通ひ合ふ、斯ういふことを申すのであります。

それで眞言宗の方では大日如來といふ佛樣を本尊とするのでありますが、その大日如來といふ方は印を結んで居らつしやる、そこで自分達もその大日如來に倣つて印を結んで、さうして一心に佛樣を念ずれば、この印を結ぶといふことと佛を念ずるといふことのお蔭で、佛樣と自分の心が通ひ合ふ、斯う申すのであります。まだそれだけでも足りないから、眞言を唱へるといつて、口に思ふ言葉を唱へるのであります。この言葉は餘り詳しい事は此處では略しますが、要するに佛のお德を讚へ、佛の絕對のお力を讚へるところの言葉であります。さういふ言葉を口に稱へる、さうすると口に稱へるといふのはたゞ口に稱へるといふだけでなく、その口に稱へることに依つて自分の心もその方に引かれて來る、口と心とが皆一致する。一致するからその心に佛のお心持が通ひ合ふといふことも望まれることであります。それでたゞ理窟を言ふだけではいけない、口に眞言を稱へ、手に印を結ぶといふことに依つて、そこで初めて佛樣のお心持と自分の心持が通ひ合ふのだ、斯ういふことを眞言宗の方では申すのであります。

そこで眞言宗の人々が言ふには、天台大師が發揮したところの法華經の敎といふものと、いま自分達が弘めるところの大日經の敎といふものとは、その道理の上に於ては同じことだ、優劣はない。併ながら法華經を讀んで見ても、たゞその道理を說いてあるだけで、そんなら實行上にどうするかといふことは一つも敎へられて居やしない。大日經の方を讀んで見ると、絕對の理を說いて居るばかりでなしに、

佛と自分の心と通ひ合ふ爲には手に印を結び、口に眞言を稱へる、それに依つて佛と自分との心が通ひ合ふといふ、その實行方法、實際の仕方を敎へて居る。それだから理窟は同じだけれども吾々に適切なといふ上に於ては、法華經よりは大日經の方が上である、斯ういふことを言つて居るのであります。それが『理同事勝』といふことであります。法華經も大日經も說かれる道理は同じだけれども、『事』といふ實行の方法に於ては眞言宗の方が上だ、何故なら、法華經の中に於ては實行の方法を別に詳しく言つてない、大日經の方は印を結ぶ、眞言を稱へるといふことをシツカリ敎へて居るのだからこの方が上ではないか、斯ういふ解釋をして居るのであります。併しこれは附會だといのであります。

兩界の漫荼羅の二乘作佛・十界互具は一定大日經にありや。第一の誣惑なり。

そこで日蓮上人が言ふのには、法華經の中に說かれて居ることと大日經の中に說かれて居ることとが道理に於て同じだといふ、そこが間違ナンだ、そこが嘘ナンだ、さうして見れば土臺がスツカリ嘘になつてしまふ。大日經の中に、法華經の壽量品の中に說かれて居るやうな『本佛』といふことは說かれて居やしない。又大日經の中に『二乘作佛』といつて、小乘の敎を學んで居つた者でも、進んで大乘の敎を學べば皆佛と同じ境界に行けるのだといふことを一箇所も言つてはない。だから敎といふものが既に不完全である、法華經に比べて見ると大日經の敎といふものが不完全だ。その不完全な敎を、完全なる法華經の敎と同じものだと思つて、さうしてそれ以上に印を結び眞言を稱へるといふことを附加へて、自分の方の宗が上だと言つたところで、それは根本が違ふ。根本から附會の上に立つて居るのである、斯う言つて居るのであります。それで『兩界の漫荼羅』

と申しまして、眞言宗の方では曼荼羅を二つ竝べるのであります。その曼荼羅といふのは、佛の力が一切の世の中に及ぶことを形に現はして居ることであるが、併し眞言宗の曼荼羅の中に『二乘作佛』とか、『十界互具』とかいふやうなことを言つて居るか、言つて居やしない、さういふことが大日經の中にあるか、ありはしない。ありもしないことを世の中に言ひ觸して居るのだから『第一の誣惑なり』世の中を迷はす事が甚しい、斯う申すのであります。

この曼荼羅といふことは屢々說かれて居るのでありますが、これを一應說明をして置きたいと思ひます。

一體漫荼羅といふことは、一通りの意味で言へば『壇』といふことであります、卽ち佛樣や菩薩のお相を一つの壇の上へ並べて祀るといふことであります。佛樣は勿論有難いけれども、佛樣の敎を世の中に弘めるものが菩薩ナンだから、その菩薩が有難いといふ心持を現はす爲に、一つの壇の上に佛樣と菩薩の相を並べて祀る、その祀る所を壇と申します。それを今度繪に現はして、佛樣を中心にしていろいろな菩薩の相をそこに書き現はす、チヨウド壇の上に佛や菩薩の相を並べたと同じでありますから、そこで今度は繪に書いたものをやはり壇と言ふ、卽ち漫荼羅と言ふのであります。

それだから簡單な意味で言へば、漫荼羅といふのは壇といふ意味になる。又その繪に書くなり、或は壇の上に佛像や菩薩の像を並べるといふことは何の爲かといふことを更に深入りして考へると、佛の敎が普く世に弘まつて、又それに菩薩の努力が加はつて、さうして一切の人がこの敎に依つて救はれるといふ意味を現はしたものが、壇の上のいろ〳〵な像であり、又その同じ意味を現はしたものが繪に書いたものに外ならない。だからその意味を言ふと今度は『具足』といふことになる。具足といふのは揃

ふといふ意味で、佛の教を信じ、又菩薩の努力がこれに加はつて行けばスッカリ揃ふのだ、スッカリ揃ふといふのは吾々の心の迷ひがなくなつて、吾々でも佛にも成れゝば菩薩にもなれる、その功德、その結果が本當にこゝに揃つて現れる、斯ういふ意味であります。そこでその曼荼羅といふことを直譯すれば『壇』といふ意味だが、意譯すれば『具足』といふことになるのであります。

それで本尊として漫荼羅を拜む、勿論佛樣を本尊とすべきだけれども、佛樣のお力の現れたところ迄を一緒に考へるといふ時になると、佛樣のお相一つよりは、所謂佛とその佛のお相の現れたその結果を一つに纏めた曼荼羅といふものを拜む、斯ういふことの方が更に意義が深くなる譯であります。それで日蓮上人のお書きになりました曼荼羅といふものも要するにそれナンです。佛樣とそれから佛樣のお力の現れたその結果とを一つに纏めて現はしたものでこれが曼荼羅であります。これは簡單な意味で言へば壇といふ意味だけれども、モット深入りすれば具足といふ意味です。佛樣のお力といふものが有ゆるものに現れる、有ゆるものに現れるそのお力に歸依することに依つて、これを信ずることに依つて、吾吾も心の中には色々な働きがあるから、それが皆一つに纏まつて佛樣と同じやうな狀態になつて行く、斯ういふのでありますからこれを具足といふのであります。だから日蓮上人は、この曼荼羅はお前達の心を映す鏡だと仰しやつて居る、お前達の心の中にいろ〳〵な迷ひがあるけれども、一つの教を信ずれば皆佛樣に一致して行く、これを表はして居る。『妙法蓮華經』といふのが眞中にあつて、まはりにいろいろなものがある、要するにまはりのいろ〳〵なものは皆妙法蓮華經の中に歸依する、一つになる、お前達の心持にはいろ〳〵な心持があるけれども、佛を絶對に信ずるといふことに皆纏まつて一つになる、だから皆の心持をこゝに表はして居るのだ、斯ういふことを言つて居られるのであります。

ところで斯ういふやうなものを文字に書かれたのに又深い意味がある。成程彫刻をしても繪に描いても佛樣の尊いことは現れるけれども、併し佛は絶對のものであるのだから、どんな上手な彫刻師でも、どんな上手な畫家でも、佛の尊いことを本當に此處に書き現はし、此處に彫刻して示すといふことの出來るものではない、人間のする事ですから……。それは成程奈良朝や平安朝時代に出來た佛像を見ると、あゝ尊いナアと思ふが、併しまだ〳〵物足りないのです、まだ本當の佛を現はしては居りません。それは人間の描いた形です、人間の描いた形に依つて、その絶對に尊い佛樣が現れるものではないのです。さういふ點から考へると、日蓮上人の如く文字で書いた『南無妙法蓮華經』といふのは、これは佛の絶對の力を現はす言葉でありますが、文字で書いたその文字を見て、自分自身の心の中にその絶對の佛を描くやうにする、斯う考へられたことは、これはただ繪に描くとか、彫刻に現はすとかいふことよりもモット深い意味であります。勿論吾々は佛像の尊いことを否定する譯ではありませんけれども、吾々の心の本尊としては、どんな立派な繪を描いても、どんな立派な彫刻を拵へても、それでは佛の力を現はし盡せないのだから、寧ろ文字で書いて、その文字を見ることに依つて吾々自身の心の中にその佛を描く、佛のお力の絶對なことを描き出すといふことの方がモット深い事でなければならない。又さういふことが出來たならば心から有難いといふ感じが起きる。たゞ眼の前に相を見るだけではない、自分の佛に歸依する心持と、その本尊とが一致するのであるから、これ程有難いことはない譯であります。さういふ意味で、初めはこの曼荼羅といふことが壇といふ意味でありましたが、後には具足するといふ意味

になり、又日蓮上人に至つてはこれをたゞ相、形に現はさずして、文字に表はすといふ事になつて參つた譯であります。

それだから曼荼羅といふものが詰り本當の本尊でありますが、扨てその曼荼羅に於て、眞言宗で大事にして居る金剛界、胎藏界といふ二つの曼荼羅がありますが、その二つの曼荼羅ではまだ『二乘作佛』とか『十界互具』とかいふやうなことが十分に現れて居ない。これを本當に現はすのには、法華經の壽量品を中心としたところの曼荼羅でなければならない。その事をいゝ加減に胡麻化して行くといふことは、これは本當の信仰を進める途ではない、己を欺くことである、人を欺くことである、斯ういふ譯で第一の誑惑であるといふことを斷定されたのであります。お互ひに斯ういふやうな曼荼羅を始終眼の前に拜んで居りましても、今申したやうないろ〳〵な關係を辨へないで、『何だか知らんけれども先祖から傳はつた曼荼羅だから大方有難いものだらうと掌を合せて拜んで居る』といふやうなことでは、甚だ心細い譯でありますので、機會ある毎に斯ういふ事をよく考へまして、さうして自分達の信仰の基礎をシッカリと立てゝ行くといふことでなければならぬと思ひます。（第二十六講了）

常懷悲感心遂醒悟

故　小西日喜

人生には必ず終りあり。終りは即ち死なり。人生の最大最深、最嚴肅なる事實、人生は先づ死に對する態度によつて二つに分れる。

一、**醉生夢死の生活**、いゝ加減な生活、或は破壞鬪爭の生活。

二、**眞劍なる生活**、命がけの生活、法悅精進の生活。

人は醒めて働く。魂が目醒めて人は本當に働く、醒めざれば忽ち危險である。醒めざるは眠りである。眠りは覺醒の前提である。快き覺醒程爽快なものはない。大活動に入るが故に、將に目的に向つて前進するが故に。

○　○

大自然の風雨寒暑は更なり、人生幾多の波瀾に健鬪したる我が父、熱烈なる慈愛と信仰を一貫して笑つて死したる我が母、最後臨終の姿まで大說法敎化に生けるが如き貴き日生師、更に眞に驚天動地の大活動、—無礙至樂、—一切救濟の巨人の歩み、—生ける佛祖の神力、此等を以ての故に我れ人生に無限の光に浴す。

○　○

人生には必ず死あり。古來より幾千萬億、無數の

死を送つて來た、けれども現狀を見て如何に人は眞實の覺醒に到る事の容易でない事が分かる。

死に直面して三種の人を見る。

第一種、　大に歎き悲んで遂に自暴自棄となり墮落する者、或は神經衰弱となり、或は發狂し、自殺し、或は他殺する者。

第二種、　當座は涙を流すけれども、所謂元の木阿彌で、木偶坊の樣な人間。

第三種、　死に發憤し、死に大感激し、人生に鮮明なる一大回轉を決行して、大精進大修養に入る者。

以上三種
- 人生下落——人生の墮落
- 人生沈滯——人生の凡化
- 人生向上——人生の聖化

人生の死に直面してその三種の中、我何れに進まんとするか！　最大多數は死に遭ふも遂に平々凡々に終るのである。又少なからず實社會には死に直面して悲慘なる最後を辿どる者がある。少ないけれども死を動機として人として大向上に精進する者がある。眞に人生は危し。『人にして敎なければ禽獸に同ず』

人生の分水嶺は正しき敎に覺醒すると否とによる。

機會は敎を俟つて光を放つ。『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』是れ人間の特權、光榮である。

○　○

帝都たる東京と地方の葬儀を見よ。先づ迷信の展覽會である。人が死んだら屏風を逆に立てる。魔除けだと云つて棺の上に刄物を置く。不作法にも靈前の御飯に箸を突立てる。蚊や理が逃げ出す樣な臭い安い線香をやたらに立てる。それで最も恐れるのは葬式の日である。勝手に友引の日などを作つてべらぼうにおびえてゐる。この上朝鮮の樣に葬る方角や場所を氣にして、遠方に運び費用を掛けて迷信を完備

すれば完全に亡國となる。

更に日本の葬儀を見よ。まるで動物園である。

先年○○大臣○○大將の通夜の時、或閣僚は碁を盛に打つて居つた。僚友の一老はたまりかねて、それをたしなめると、今度は漫談で夜を明かした。全國民環視の的たる大臣級の人々でも民間の愚民と同樣である。そんな時こそ靜かに道を求めて深き魂の覺醒を計らねばなるまい。眞劍味が少しもない。國民敎化の爲に憂ふる。

又もとより說法敎化すべき體驗の權威ある法師など拂底でそんな所に居らなかつたのであらう。即ち一般に酒池肉林で漫談から猥談で通夜をする。これ全く動物園である。億百千萬年經つてもこれを繰り返へしては到底佛樣は出來ない。我が國は流石佛敎の流布せしため人が死ぬと『うちには佛樣が出來ました』などと云ふ

佛樣が出來た以上は、後に殘つた者が早速財產や、寺院の爭奪や、或は只物を食つて馬鹿話をする、哀れにも無慚なる動物であつてはならぬ。それでは餓鬼や脩羅の親子兄弟が出來たので斷じて佛樣が出來たのではない。

本來人としては完全なる人格者、即ち如來、佛陀となるべき專門家ばかりである。

生きておはしき時は生の佛、今は死の佛、生死共に佛なり（日蓮聖人の聖語）

これ實に人生の理想であり、權威であり、光榮である。僧俗共にする事の意味も知らず、向上の決心もせず、敎化に向はず、魂の這入らない讀經、音樂等の法要、葬儀費の掛値、値切り談判、生ける道念が何處に輝く！　左翼陣營をまつまでもなく死せる宗敎界の打倒は日を追ふて盛になるべきである。

○　○

先頃日本に有名な法師の遷化に當つて、其の高弟が東京に於て法要を司つた。或る盲目の帝都に於

ける純眞にして識見のある苦難を經たる青年傳道者があつた。式の途中に涙を流し聲を呑んだ。それは至誠、感激なき法要に悲憤の涙を流したのである。讀經の聲も斷續したのである。

○　○　○

更に悠久なる人生を思ふ、人生には遂に涙あり。大に泣いて然る後に醒めよ。

薄つぺらな涙では、魂の覺醒は來ない。

涙に二つある。俗涙と法涙である。

俗涙とは果ない涙である。永遠に生くる能はざる執着の涙である。

法涙とは即ち聖涙である。法を守り生きんとする壯烈なる涙である。永遠に生きんとする偉大なる感謝歡喜の涙である。

○　○　○

人生は我欲我見、我情を離れて、始めて法に生くる事が出來る。法悅の生活が出來る。本當の父を見る事が出來る。

『常に悲しき感を懷いて心遂に醒悟す』

如來、誠諦の語は永遠に輝く。！

佛祖法統愛護と日本文化建設とに關する我が統一團の時代對應的一使命を行ぜよ

佛子　河合陟明

佛祖の照鑒を仰ぎて日本文化建設の爲に力を致して吳れん事を予は望む、是が予の本懷である、汝等教義の精要を死守せよ。

とは實に　我が統一團開創の總裁　聖應院日生恩師　臨滅の遺訓である。本團は

第一　佛祖正眼の法統を擁護する事

第二　我國精神文化の精髓を體系的に發揮する事

第三　此に適當する學風を振起する事

第四　時代對應の教化を研討して之を實行する事

第五　小にしては日蓮門下の爲め大にしては我國文教の爲めに每に覺醒を促しつゝ嚴然として統一の學風と教化とを守持する事是れなり

教旨の正明　研學の闡達　活動の旺盛　此等は統一團の標語なり

これ本誌の開卷劈頭に常に唱道するところ、

かくの如き理想に則つて　明治の聖世　命世の教傑　本多日生恩師に依りて　本團が開創せられてより　實に四十有四年我國異數の歷史を有する宗教教化の正定聚として　本團は不斷の活動を存續し來つたのである。

昭和六年三月半ば　恩師渚焉として化を他界に遷さるゝや　其後に於て　夙夜精勵　恩師の遺命を奉じ　經營を財團組織に改め、八年紀元節の佳辰に膺り　法輪常轉　梵音雷震　開堂の第一聲を帝都の一角に擧げ　立正安國の大義を　靠毅の下に宣揚してより　こゝに七春秋　常に捧持するところの大理想たる

佛祖法統愛護と　日本文化建設と、或は即ち　永遠不朽と時代對應と、法國二面　體用兩道に亘りて不敏なりと雖も本團同志協力提携し、鴛鴦に糟ちて微力を捧げ來つたのである。

たま〳〵昨秋九月末十月初、國民義務教育たる　小學國語

讀本卷十二より、久しく教へられ來りし「釋迦」の一課が　突如として削除せられ「修行者と羅刹」なるものに代るに至るや、果然！　一大旋風を佛教界に捲き起し、喧々囂々の聲新界に漲り　甲論乙駁の評世上に溢れ、或は近來すこぶる佛教が我國文教の上にはた又國民思想陶冶の上に疎んぜられつゝあるの現狀を詰り實例を擧げ、或はかの頑迷固陋なる一部神道者流の淺見短慮を糾彈し、或は進んで昭和の聖代　第二の排佛毀釋來らんとするに非るやを叫び、鉾を揃へてその不當を鳴らし妄見を叱し、かくの如く宗教新聞及び諸機關誌等は、連日その經過報道と是非の議論を以て紙上を賑はしたのである。而て佛教界の大勢が　鼓を鳴らしてその復活を要求し改善を主張したるは言ふまでもない。　予は曾ての佛教綜合的中央大殿堂として聖德太子殿建設問題に對し、釋尊本尊の大義名分を絶叫し、全佛教界に敢然孤軍奮鬪し、百萬の大軍を目前にするも斷じてひるまず、嚴寒風雪を冒し烈暑酷熱を通じて　日夜佛祖に熱禱し懇禱し誓願して　血肉を捧げ血涙を絞り、出でゝは諸方に奔走して、大義を說き　名分を語り正義を敎へ、殉敎法戰　佛敎の正氣　天地正大の氣は　懸つて予が一身雙肩に擔負するを覺悟し、意氣軒昂　氣魄凜然、しかも内にはいはゆる本團同志の　終始一貫すべき結束統一と外には我が佛門及び天下の識者に對する　或は剛義折伏に或は說得慫慂に　苦心慘憺すこぶる憂慮を回らし暗涙に咽び、眞に内法城を固めて外大法を天下に擁護するの容易ならざるを　辛酸艱難骨髓に銘して痛感體驗し、遂に心身を酷使して病褥に倒るゝに至りたりし當時を思ひ、時の推移、然り特に實に全佛敎界が　今や漸く釋尊擁護の一大事に目覺むるに至り努力するに至りし、否むしろ目覺め且つ努めざるを得ざるが如き一大事態を惹起するに至りし實情を眼前に直視し、然り曾ては佛敎徒自ら敎主釋尊を拾閉閣擯し大義名分を蹂躙し去つて、佛祖に忠ならず又國家に忠ならず、内は佛祖の大法を紊り、外は國民の侮を招くに他ならざりしものが、一旦外的壓力を以て釋尊に指を觸れらるゝや、俄然憤起して佛祖の神聖を主張し擁護するに至る、その斯くの如き事態を惹起せしは、實に佛祖に不忠また君國に不忠なる佛敎徒への　佛祖の當然の責罰であり、因果必然の應報であり、また荷ひ負はされたる運命であり、而てその汚名を雪ぐべきは又これ佛敎徒たる者の當然の責務であり、義務であり、支拂はざるを得ざる負債たるを　痛感し洞察し双照大觀して感慨そゞろ極り無きを覺えずんばあらず。

而て予は今回此事の起りし當時夙にこれを知り、同憂の士と相謀つて具さに事情を探求しまた畫策するところあり、又以て本團の同志と相議すること回を重ねしも、不幸にして未だ機緣熟するを見ず　遠かに團議を決定して實行運動の步武を進むるに至らず、荏苒日月を閲し遂に越年するに至つた。

抑も法華經法師品に儆訓せられたる、いはゆる
大信力　大志願力　諸善根力を有し又發し、
易きを去つて難きに就くは大丈夫の志なり、
終始一貫その志願を捨てず、願波羅密　力波羅密を以て　その大善事の達成に勇往邁進すべきは、これ法華經の行者　人天の大導師たる者の本懷であり面目であり使命であらねばならぬ。況んや
佛祖法統愛護と日本文化建設とを以て　一貫の大主義　不動の標語となし、毎に我國文敎の爲めに覺醒を促さんといふ
我が統一團の陣營たる者に於てをや。
然り　本佛釋尊と日本國體とを以て　日月とし眼目とし支柱として立つ我が統一團、この二大絶對位に無上の神聖尊嚴を仰ぎ　その靈光・靈力を仰いで立つ我が統一團が、是の如き明瞭なる　釋尊擁護・日本文化の根本問題に對して、正にその態度を決定して　その使命を實現するに至らずば、其機に際會しながら其機に乘ぜず、其法を擁しながら其法を守らず、遠くは佛祖の照鑒に應へず　近くは恩師の遺囑に酬ゐず、敎を以て君國に報ぜむとする敎家として　法國兩面に忠ならざるは、まさに萬死に値ひするものならざらんや。
慚愧　々々　生等　佛祖の前に慚愧し懺悔し奉る。
而て生等はこゝに深く鑑るところあり、奮然蹶起し、本問題に對しても今や拱手傍觀　默止すべきに非るを一段と自覺し
虔んで佛祖三寶の照鑒を請ひ奉り、而て更に、
遺訓哀痛猶ほ耳に在り　切々として骨髓に銘する　聖應日生恩師の嚴誡を奉じて、
講課千篇何の俟つ所ぞ　神聽血持克く法統を傳へむ
本團使命の一分に邁往せむと欲す。即ち
左に錄するところの一文は、昨秋夙に執筆し、同志の結束と團議の決定を俟つて　遠かにその實行運動に供せんことを待ちたりしもの、空しく筐底に藏することゝに幾日、今や少しく更に是に加筆し、當に速かに本團の決議を經て、まづ文部當局に呈出開陳し、更に天下有識の士君子に贈り、而て固より廣く大日本佛敎徒の一片耿々の至誠に訴へむと欲す。
あゝ釋尊殿建設の大主張は今や先づ釋尊傳復活と結晶せるか願はくは本團有緣の諸先覺・同志盟友・團員各位　卿等まさに佛子の本分に自覺するところあらば、擊節共鳴して　當に執らむとする本團使命の浮業に　絶大の支援を寄せらるべきや必せり矣、合掌
南無妙法蓮華經

國定教科書に　釋尊傳を　內容を改善して
復活せられたき　希望意見書

一　人生に於ける二大絕對問題を論ず

抑も人類文明の上に於て、最も重大深遠にして千古の懸案たるところのものは、一は知識と信仰　即ち哲學と宗教の問題であり、一は國家と宗教　即ち愛國心と護法心の問題である。この兩者が根本的に調和解決せらるゝならば、國家の隆昌　文明の發展　人類の福祉は期して待つべく、將來益々多幸なるものとなるのであるが、もしこの二個の大問題が徹底的斷案を見るに至らずして矛盾分裂するときは、人間の不幸　國家民族の憂これに過ぐるはなく、總じて全人類の苦惱　全文明の破綻となるに至るのである。

今もしあらゆる國家民族に正義の德化と威力を與ふる如き理想の國家が儼存し、しかも他面に於て、かくの如き國家を尊重してこれに順應同化せらるゝと共に又これを包容し、更に全人類の心靈を開拓して　實在不滅の要求を完成せしむるが如き理想の文明が存在し、進んでこの兩者の夫々有するところの文明最高の內容と　文明統一の實力との、二大理想的勢力が究極的に統一せられて、その理想の實現遂行を見るに至るならば、こゝに全人類に靈肉兩面の眞正の福祉を　共に施與することを得て、いはゆる一乘の大德教を形成し、現世の絕對權と　靈界の至上權との統一といふ　人類最大の福音を齎すに至るであらう。

A　完全國家・絕對國家としての大日本

凡そ人間生活或は文明生活と、國家生活との二箇の範疇は果して完全なる一致をなすものなりや否や。前者の範疇は後者を超越するものとして、即ち國家的統一は人間生活の一部分に過ぎずいはゆる政治的統一に過ぎるものとして、乃至は外部より力を以ての統一として、これに對して物心二面に亘る人間のあらゆる欲望生活は、國家の範圍より更に廣きものであるとなし、國家全體が眞に有機的なる目的論的統一を有せざるものが、從來の乃至は現代に於ける諸國家間の實狀であり、又深き惱みであるのである。

然るに之に反して、我國に於ては國家統一の中に人間生活の總ての方面の統一がある。かくして國家生活を全うし人間生活を全うするのである。抑も人間生活の統一といへば、その中に萬物諸共に統一せられるといふことがなければならぬ。從つて人生に於ける一切文化の諸領域も統一せらるゝのみならず、また自然界の國土・地理・風光・季節・山川草木等も悉く統一せられ、國民も國土も全く一つとなつて　天皇に仕へ奉り、かくてこれらの悉くが皇室の御稜威の一分となり、その恩德を莊嚴するものとならねばならぬのである。

「天の三光に身を溫め　地の五穀に魂を養ふこと　皆これ國王の恩なり」と道破した古哲の感激はまた我等の感激でなければならぬ。

大君は神にしませば眞木の立つ　荒山中に海を成すかも

御民吾れ生ける驗あり天地の　榮ゆる時に遇へらく念へば

いざ子どもたはわざなせそ天地の　固めし國ぞ大和島根は

と、古代萬葉の歌人が讃美して謳つたところのものは、今日に於ても依然として尙、否益々その眞意義を發揚せなければならぬ。日本精神とは實にかくの如く天然と歷史と　國土と民性とが、一系無窮の皇恩に感孚して　幾千年の間に培養され鍛成され來つた　至大至剛の一大精神である。

由來我國に於ては、國家即ち人生であるのみならず、人生と萬物とは同根であるとする我國そのものが一の大いなる和である。古來大和國といひ、又現代特に昭和と稱せらるゝは、實に深い意味がある。されば眞正にして完全なる統一國家であれば、古事記・日本書紀等の古典の示す如く、自然界もまた國家の中にあり、國の成立と萬物成立とは　その根本を一にせねばならぬ。人間生活に於ける文化の諸方面も一とならねばならぬ。即ち自然の風土を始め、文化の諸勢力たる、政治　經濟　軍備　產業　學問　道德　宗教　藝術等　その各々が夫々獨自の權威と特色を發揮しつゝ、而も皆遍一貫の同一生命を流通せしめる、即ち國體に淵源して歷史的傳統の裡に培養せられたる　萬古一貫の大精神によつて統一せられねばならぬ。もし其等の諸文化勢力が各々その獨立性・自主性を主張して割據し、これを內面的根本よりして綜合するといふことがなければ、それは單に別々の原理を並べるのみであつて、生命はそれだけ稀薄になるを免れない。かくて諸文化生活が國家生活と融和せざるものを持つに至らば、それらの反映する生活形態は國家維持を困難にする。國家生活は內面的統一を缺き、國民精神を分裂せしめて、國家の禍根を包藏するに至る。現代各國の惱みもこゝにあり、又實に我國現下の問題も重點はこゝに存するのである。

由來統一とは眞に生きるの道である。一切の抽象的・遊離的なるものを許さゞる嚴密なる全體として、善は實在の最も具體的なる統一である。意識の統一によつて人格が成立ち、その意志的生命の內容の連續一貫せる充實發展によつて、人

格の歴史が考へられる如く、國家も亦かくの如き精神的意志的統一　人格的・具體的・善の統一を有せねばならぬ。固より統一は特殊を離るゝものでない、普遍は個性を生かさねばならぬ。實力ある統一のためには特色を維持し發揮せしめねばならぬが、而も其等が皆　内部生命に於ての同一性を宿し、一大調和の美を發揚せねばならぬ。之を完全國家に於ける和の理想といふ。和は内面よりの統一にして根本に於て同じいものが存せねばならぬ。是が我國に於ける理想の相であり、又凡ての國家の目的でなければならぬのである。

されば人類救濟の宗教的理想も、人道正義の道德的理想も東西文化融合の文明的理想も、乃至吾人の一切の理想は、皆國家的團結の組織と力とを通して始めて十全に行はるべきであつて、この無上の國體を根本的に擁護し、文化の一切、否文武一切の力を擧げて國家に朝宗し國家に貢獻し　以て天壤無窮の皇運を扶翼し、眞にいはゆる轉輪聖王と稱すべき　無限の德風と絶大の威力とを以て、始めてこゝに我が皇國本來の大理想たり、人類共通の両てまた最高の目標たる、全世界融和の一大樂土を、この地上に建設することを得るに至るであらう。

B　文化的要求・宗教的要求の絶對性

抑も靈妙卓拔の大因緣によつて成立ち、國體本來の實相に基いて、太古にして太新なる　萬古一貫の日に維れ新たなる文化を創造しつゝ、天業恢弘の大使命を實現すべき我國は、その本質に於て眞にいはゆる完全國家として、吾人の生活の全般に亘り統一的支配をなし、絶對の權威を以て臨むのであるが、然しながら他面に於て人間は生命の問題に關する根本的解決を要求し、しかもこれは絶對權威を有する國家に對しても、尙ほ更に根本的問題であるのであつて、人類本然の性情に由來し、人間心靈の最深秘處に確乎不拔の根據を嘗ゑ、いかなる權力威壓を以つてするも、この宗教的・哲學的要求と、その正明適確なる解決　理法　信念を、歪曲し顚落し剝奪することは　到底不可能であるのである。凡そ國家生活にせよ、文明生活にせよ、この人間存在の根本的意義目的、即ち眞實在の問題に對して、徹底的解決を把住するに非ずんば、人間一切の生活はその根礎極めて薄弱にして常に動搖するを免がれず、こゝに國家の深憂を宿し、こゝに社會の不安を將來し、人間生活の各方面に亘り　諸種の濁亂と慘禍を惹起するに至るのである。況んやその確固不拔の思想信仰を彈壓せんとするに於てをや、たとひ百千の大河を逆流せしむるとも能はず。これ實に人間にとりての絶對第一義、古今東西を一貫して　奪ふべからず易ふべからず滅すべからざる、根本到頭の大問題たるを知るべきである。

二　日本精神の本質を論ず

顧つて我が日本精神の本質なるものを大觀するに、抑も日本精神の本質は、

（い）　天祖授國　天孫降臨の際に宣はせられたる天壤無窮の神勅に基き　玆に皇國の宇宙的靈德に淵源する尊嚴を發し

（ろ）　神武天皇東征の大詔に於ける

積慶　重暉　養正　の三大理想に至つて、日本精神の思想的意義と實力とを明徴ならしめ給うてゐるのである。即ち

慶を積む　とは仁愛慶澤を累積して　宗教的情操を深むる

慈悲平等の大平和主義であり、

暉を重ぬ　とは智暉慧光を重疊して　文明的睿智を高むる

創造發展の大進歩主義であり、

正を養ふ　とは大公至正を養護して　道德的實力を强むる

秩序正義の大統一主義である。

されば日本精神の中に含まるゝ宗教性の一面、又、世界一切の文化を包容同化して　生々發展する進取開發の創造的精神、更に文武兩面に亘りて、人類正義の思想と福祉を擁護する皇道及び皇軍の破邪顯正の威力、遡つてはその無限に神聖なる皇室の御稜威等は、その思想的淵源を實に此の處に發するのである。

我が皇位の御璽たる三種の神器は　洵に是を象徴せられたるものである。

1、從つて　應神天皇の御代に、儒教が渡來し、朝廷これを採用せられて、下國民に一段の德化を潤され、

2、欽明天皇の御代に、佛教が傳來して、特に聖德太子が篤くこれを尊信せられ、

十七條憲法に於て　篤敬三寶の旨を宣はせられて、一國上下の宗教的信念を培養し、更に神儒佛三教一貫の文化理想を明かにして、國民精神の綜合的圓滿なる調整と積極的進取の態度とを發揚せられ、

3、明治天皇が　五ケ條の御誓文に於て、

知識を世界に求め大いに皇基を振起すべしと宣はせられて、開國進取の國是を定めらるゝと共に、西歐文化を攝取同化して、國力の充實・國威の伸張を促され

4、今上陛下が　即位の詔勅に於て、

我が皇祖皇宗惟神の大道に遵ひ　天業を經綸し萬世不易の丕基を肇め　一系無窮の永祚を傳へ　以て　朕が躬に逮べり

朕内は即ち教化を醇厚にし　愈民心の和會を致し　益國運の隆昌を進めむことを念ひ　外は則ち國交を親善にし　永く世界の平和を保ち　普く人類の福祉を益さむことを冀ふ

と宣はせられ、國民はこの大御心を奉戴して、國體を明徴にし、共產赤化等の反國家的一切の魔想毒說を折伏し、特に宗

教界また奮然蹶起して、教化醇厚・民心和合の聖旨を遵奉し以て信仰報國を叫び人心教化に努め、しかも今や皇軍が外アジヤ大陸に於ける皇道の世界的理想實現の聖戰に勇戰奮鬪しつゝあるに相呼應して內は國民精神總動員し國家總力を擧げて、內外共に八紘一宇の天業經綸・東洋文明の復活宣揚・アジヤ再建の聖業に邁進しつゝあるもの、これ皆、皇室御みづから皇祖皇宗一貫の皇謨を奉戴して、種々なる文化を攝取包容し、之を國體に朝宗同化せしむるの範を示したまひ、國民またこれを規範として日本精神の傳燈的精華を發揚し、以て日本文明の豐富圓融なる綜合的創造發展を育成し、更に進んでその慶澤を四隣に及ぼすべく國を擧げて日本民族天賦の使命を遂行しつゝあるに外ならざるものである。

（は）　斯くの如くして我が日本精神の本質を形造る日本文化とは、明治維新に至るまでは、神儒佛三教鼎立して渾然一體系を成したるものであり、その何れの一をも廢すべからざること　宛も各兵種共同して始めて戰鬪の目的を達すると同樣である。明治開國以後に於ては、更に西洋文明を攝取包容してこゝに七十餘年、昭和今日の聖代に至つてはあらゆる部面に殆ど之を攝取することを得て、思想貿易の上に於ける輸入の久しきこと、國史に伴つて正に二千數百年、今や名實共に東西文明融合統一の時運に際會したる秋、俄然東亞の風雲日支事變を惹起し、こゝに我はこの一大統一的文明を提げて人類史上に千古未曾有なる新世界秩序の創造建設に乘り出すに至つたのである。

（に）　かくの如く我が國史を案ずるに、

まづ皇室御みづから文化的進取・國運發展の先頭に立ちたまうてゐるのであつて、即ち應神　聖德　明治　等の烈聖が、外國文化を攝取採用せられたのは、皆肇國以來の大理想に基いて爲されたるところであつて、決して自己の好むところに隨つて　或は取り或は捨つる等の態度に出られたものではない。皆これ萬古一貫の大精神が此間に周流してゐるのである。

されば我が日本精神の本質、即ち或は　皇道といひ、或は惟神の大道と稱するものは、誠に包容の靈教と稱すべきものであつて、實に理想が斯くの如く包容的であるのみならず、實際の歷史に於ても　上述せるが如く明かにこれを成し來つてをり、かくて日本精神は總ての文明の美を鎔めて　これを綜合大成すべきものであるのである。

從つて日本精神は、異邦の文化に對して、決して偏狹固陋排斥の鎖國的態度を執るべきものではない。又固より卒然として盲目的屈從の態度に走るべきものでもない。常に堂々たる一貫不偏の自主的態度を確立して、批判撰擇及び同化統一の力を發揮し、以て我が國家品位をして愈々文質彬々たらしむる所以の道であらねばならぬのである。

（ほ）　明治天皇の教育勅語に　國を肇むること宏遠にしてとあるは實に國家肇造の起源が太古にして宏遠なりといふ事實のみに止らず、その內面に含まるゝ理想の宏遠なること、即ち思想的意味內容の宏遠にして、穆々たる天地の靈德に違り、神聖尊嚴　宗教的意味のものをも包有してゐることを示されてゐるのである。故に　德を樹つること深厚なり　と宣はせられてゐる。この宏遠といひ深厚といふは、その眞精神を宣揚するときは、天地に對する恭敬　神明に對する崇敬の觀念となるのであつて、こゝに宗教的の道德が古來より大日本に存してゐるのである。忠孝のみを以て日本人の道德とするのではない、天恩の觀念　敬神の觀念も　最初より國民道德として傳はつてゐる、即ち最初より　敬神愛國と稱してゐるのである。

從つて我が國體を會得して　充分に力をその擁護に盡すには、雄渾卓牢なる宗教心を涵養するを忘れてはならぬ。過般世界無比なる我が國體の學的解釋に關する憲法論に於ても、果然國體明徵問題を惹起したるが如く、我が國體は單なる法律的解釋のみを以てしては到底滿足されるものではない、極めて崇高深遠なるところに淵源してゐるのである。即ち我が皇室の尊嚴は絕對莊嚴なる意味を有し、宗教に於て　神明佛天に向つて顒るゝ心と相通ふものが存してゐるのである。故に宗教心を涵養するときは、我が皇室　我が國體の尊嚴を神會することはできなくなるに至るであらう。されば皇室の尊嚴を景仰し　國體の眞意を會得せんとすれば、宗教を信ずる如き崇高なる精神を否定してはならぬ。

かくの如く我國體は道德的要素のみならず　宗教的要素を有する、即ち宗教性を帶びてゐるのである。固より道德的・法律的の要素もあるが、最も大切なる意味は　宗教性を包有せる國家であるところに存するのである。

（へ）　さりながら、日本國體は純宗教として成立せるものではなく、從つて惟神道は宗教宣布を目的とするものではないが、然しながら國家存立の問題と　生命實在の問題とは、冒頭既にこれを明かにしたるが如く、共に人生に於ける二個の絕對問題であつて、一面に於て、人間性情の根本に由來する　宗教的絕對の大理想が、宇宙人生の實相と眞意義を敎へて、他面に於て、人類世界の統治經綸道に於ける絕對權威たる　國家の存立發展に根本的に貢獻し、その經綸の必須不可缺なる一大文化的勢力として　益々國體を莊嚴し國運を翼贊し、かくて天壤無窮の神勅に淵源する　萬世一系の皇室の御稜威と、久遠常住の宇宙的根源に發現する　宗教的救濟の靈光とは　共にこれ人生に於ける權威恩德の二大源泉として、而もその靈德根源を一にし、統治經綸道と　生命實在道と　文明道義の統一的實力と　永生實現の絕對的大道と、兩々相攝し相交り互に協力して　人類の慶澤を將來すべく、かくて以て始めて眞に　我が八紘一宇の世界的大理想を達成するを得

るに至るであらう。

（と）今や支那事變の勃發するに至り、皇國が眞にその理想を實現すべく　先づ東亞の盟主として名實共にその力を具へ、世界の檜舞臺に立つて自主獨往の大國威を發揚し、以て世界指導的地位を贏ち得るがためには、列强に對し　ひとり軍備の平等權を獲取するを以て足れりとせず、愈各方面の文化を調整し、今後數年を期して、學問に於て　政治に於て　產業に於て　富力に於て　更に實に人間心靈の最奧底を支配する宗教に於て、卽ち文武全體に於て、優に彼等を凌駕するの目標を定め、以て擧國邁進するに非ざれば、世界平和の安定勢力たる皇國の大使命を果すことは到底覺束ない。識者は須く此に深く鑑るところがなければならぬ。

三　日本精神より佛教を遏すべからず

かくの如き天業恢弘の大使命を有する　我が日本精神の一大本質として、抑も佛教は、凡そ總ての文明の根本基礎たる眞實在の觀念を賦與したるものにして、この根據よりして我が國體の解釋に深遠なる意義を開顯し、以て眞如實相の哲學的根柢と、神明靈德の宗教的由來とを說明し、更に宇宙萬有殊に吾人一切の生命の不滅永遠なる大理法を明し、進んで宇宙に於ける絕對的覺者の人格的根本實在を敎へて、以つてこの佛陀の靈存に對し　無限の信仰を捧げしむるに至り、かくて宇宙の實相・國家の體性・生命の本質・人生の目的等に至るまで、周匝圓滿なる意義根據を開顯したるものである。

是の如くして佛教が、日本精神・日本文化に貢獻し、又以つて日本國體に朝宗して、これを翼贊し開顯し、上は皇室より下萬民に至るまで　至大の感化を及ぼしたる、我が國精神文明史上の實績成果に至つては、何人もこれを否定するを得ず、否むしろこれを讃歎せずんば非ざるところであらう。

然り今これを事實に徵するに、上は歷代の皇室を始め奉り下は我が國史を飾つて　後來の國民及び國民精神に偉大なる感化を與へたる　聖賢　高僧　偉人　名將　等は、いづれも佛教の深き信念に培養され來つて、以つて我が國體の精華を發揚したるものである。卽ち欽明天皇の御宇佛教の渡來してより後の我が國史の上に眼を曝す時、まづ推古天皇・聖德太子を始め奉り、代々の烈聖に於かせられても、又下には和氣清麻　傳敎大師　菅原道眞　日蓮聖人　楠木正成　北畠親房　一條兼良　水戸光圀　等、凡そ國史上文武兩面に亘りて精彩を放ち來りし幾多の人傑は、皆これ深遠なる佛教の信念に養はれて　神儒佛三道の調和圓滿なる觀念に安住し、據つて以つて我が國歷史の精華を織り成したる人々である。

斯くの如く佛教は、我が國體に深遠なる意義根據を開顯し進んで廣く國民に實在不滅の宗教的信念を與ふるのみならず、また國史上に於ける幾多の偉人と感化を生み出だしたるもの、これ全く日本民族の精神的血液となり　肉團となり骨髓となり來れるものであつて、固よりこれを尊重せずんば非ざるところである。されば我が國の現在及び將來、如何なる國家革新　皇道維新を行ふにあたつても、もし佛教を排毀するが如きことあらば、これまさに歷史を破壞し、文化を破壞し、日本民族の精神的血液と魂との一部を無殘にも奪掠するものにして、神人共に許さゞるところ、實に暗愚暴擧！これより甚しきはない。況んや佛教が曾に過去に於てのみならず、現在以後將來に於て益々　日本・アジヤ・及び全世界の上に愈々光輝を發揚して、精神的無上の財寶と成り、以つて人類のあらん限り、其の人類普遍の性情に由來し　人格的不滅の要求に基く　宗教的眞實在の把握、卽ち永遠の生命の要求を完全に滿たしむる所以のものなることに想到せば、眞に我が國に於てのみならず全人類に對して不朽なる　佛教の權威と靈力を洞察すべきであらう。

斯くの如く　我が國及び全世界の過去及び將來に、無限の光明を放ち來り又放たんとする人類最高の宗教思想たる佛教の教主釋尊の大人格と大理想とが、我が國民の精神界裡に普く知悉せらるべきは　固より當然のことであらねばならぬ。況や佛教の深遠なる宗教思想が、我が國體の幽玄なる靈德と意義とを　實在の根柢より說明し開顯し、以つて益々不拔の國民的信念を確立せしむるに於ては、愈々佛教の大理想を全國民に知らしめ、又夙に幼童の頃よりして　國體の尊嚴を會得せしむると同時に、かゝる宗教的情操をも不斷に涵養し、特に佛教の教主として　人類最高の宗教的典型懷表たる釋尊の大人格を信知せしめ　其の深き感化に浴せしむるは、誠に望ましく且つ願はしきところなりと云はなければならぬ。

四　國民教育に釋尊傳を改善復活せよ

論じてこゝに至らば、我が國文教の府に在るものが、須く佛教に對して深き認識と　謬らざる見解を有すべきは、亦敢々を要せざるところである。然るに今回我が國民教育の教材中より、『釋迦』の一課が削除せられたることは、眞に遺憾至極のことゝ言はなければならぬ。從來釋尊の課は、教材の內容として、又更に釋尊の傳記　人格　覺り　活動等、乃至文章の表現等に於て、吾人佛教徒よりすれば、遺憾なる點も尠からずあつたのであるが、しかも尙ほ可憐なる我が小國民に偉大なる釋尊を知らしむるものとして、吾人の深く多とするところであつたのである。之に反し、今回これに變れる『修行者と羅刹』なるものを見るに及び、その求道の眞劍さを敎へたることや、佛教の要諦たる覺りの一面を、我が國の人口に膾炙せる『いろは』歌の道理に依つて現したることや、又その取材及び表現に就て、兒童の興味多からしめんが爲に、文

學的考慮を拂はれたることなど、當局苦心の跡を察するに吝なるものではないが、併しながらこの物語りの非現實的・非科學的・非歴史的にして、神話的・乃至架空的とすら見らるゝ點、その純乎たる宗教的求道說話として又いはゆる本生譚として、佛教思想の相當素養あるものにとつて眞に價値あるべしと思はるゝ點、等々の理由よりして、現實的・科學的・歴史的・社會的知識より有せざる小學兒童に對しては頗る不適當なるのみならず、更に實に一分にても多く　眞實在の大人格たる釋尊の歴史的・現實的感化に觸れしめんとする吾人佛教徒の　否更に進んで苟くも日本國民の文化的教養なる立場より論ずる　國民教育の根本精神より達觀するとき、純然たる史實として切實なる釋尊傳そのものを　教材中に入るゝことをもつて最も善しとすること、固より論ずるまでもなく明瞭なるところである。

こゝに於てか吾人は、文部當局に深く望むところあり、且又必ずやその實現を要請して止まざるところのものがある。即ち、從來の釋尊の一課を、大いにその內容を改善してこれを復活し、その表現に當つては文學的・藝術的とするも、その內容に於ては深く宗教的滋味を湛へて　崇高なる信仰的情操を涵養し、以つて偉大永遠なる釋尊の不滅の靈光に浴せしめ、我が可憐なる小國民をして將來益々人格修養に志さしめ、特に實在不滅の宗教的大信念を獲得して、能く國家有爲の人材たらしめんこと、これ實に吾人衷心の希望であり念願であるのである。蓋しかの釋迦の課を教へたる教育者の經驗に徵するも、これを學べる兒童のうち、「人は何の爲に生くるか」、「人生の意義目的は如何」等の大いなる問題に對し、深き關心　或は探究心を起し、また特にその解決を眞劍に求めんとするが如き兒童の　甚だ尠からざりしと言ふ事實を聞くに及んで、吾人は實にこの幼學童　小國民の腦裡に、かゝる眞摯なる宗教的觀念の萌し居ることを知り得て、誠に感慨無量　讚歎これを久しゆうして止まず、而してまた實にこの可憐なる學童が、長じて後この人生問題の第一義に對する根本到頭の解決と不動不拔の安心立命を　體得せんことを祈つて止まざるものである。

而して斯くの如く　大いに改善せられたる釋尊傳を、再び國民教育の教材に復活するにあたつては、宜しく文部當局は佛教界の諸權威或は諸機關と相互協力し　以つてその內容の十全圓滿なる事を期せられんことを、更に吾人は切望して止まぬ。

五　我國教育の各層に佛教科を設置せよ

更にまた嘗に小學兒童のみならず、抑もこれを教ふる教育者そのものに於て、深遠且つ溫かなる宗教的情操及び思想の所有者たることを要請せらるべきは、固より論なきところであらう。こゝに於てか吾人は、我が國教育の根本方針に對して　一大刷新を翹望せずんば非ざるところのものがある。凡そキリスト教及び回教諸國等に於て、明らかに見らるゝ如く苟くも一國文化の精神的主流を成せる　偉大なる傳燈的思想に對しては、その國家のあらゆる教育的階梯と機關とに於て、國民精神　あるひは國民常識として先づこれを學ばしめこれを根柢として　その上に更に進んで　異邦の諸文化思想を攝取せしむるやう組織せられてゐるのである。

我が國に於ては果して如何。曾て回教國トルコの一識者が我が國に來り、その教育狀況を視察して語つて云く『我が國(トルコ)に於ては、あらゆる教育を通じて、我が精神文化たる回教を教へるのである。然るに、世界第一にして且つ唯一の大乘佛教國たる貴國日本に於て、この偉大なる佛教といふ崇高にして而も世界的なる精神文化を一般的教育として教へないといふことは　實に怪訝の念に堪へぬ。これは如何なる理由に據るのであるか』と。

洵にこの言の如く、我が國中等教育以上に於て、即ちまた高等　專門　大學等の諸學園に於て、また特に師範教育に於ても、東洋文化としては、纔かに儒教の經書の一分を學ばしむるに留まり、宇宙人生及び苟くも文明なるものの根柢的觀念を成すべき　眞實在の學たり教たる　哲學及び宗教思想に至つては、實に我が民族祖先の深き靈性を開拓して　光輝ある幾多の歴史的精華を生み成したるのみならず、更に將來また一段の光明と活力とを　普く　全人類の頭上に投ずべき、偉大且つ豊富なる宗教　道德　哲學　藝術等　渾然融合せる一大理想的文化を、惜しげもなく放擲して顧ず、殆どこれをたゞ西歐の思想文化にのみ求め、而してその後塵を拜するを以つて甘んじ居るが如き、まことに惘むべく且つ悲しむべき一大失態ではないか。

あゝ浩瀚なる佛教の經典論釋幾千百卷、天地宇宙の秘藏人類不朽の光明　世界群籍の寶庫　靈界久遠の梵音、空しく寺院の經藏に堆積し、徒らに紙魚蟲の食らふところとなる。苟くも無上最尊の教を奉じ、至大至剛の道を奉じて、天下の師表に立たんとする志士仁人、こゝに於て實に感慨なき能はざるを得ぬ。吾人は誠に全佛教徒の根本的反省と一大奮起を促し、また以つて文部當局が愼重熟慮のもと、おもむろに國民精神陶冶大成上に於ける　皇國百年の大計を確立し、以て我國教育の各層に佛教の課目及び講座を遠かに設置し、かくて國民精神を更に深遠なる模柢よりして培養するに至らんことを　切望し且つ勸告して止まざるものである。

六　我が帝國識者の明斷を促し、大日本佛教徒の奮起を望む

今や帝國が擧國聖戰の目的に邁往し、神武肇國の宣言たる

天業恢弘の大理想を奉じて　國策を大陸に經綸し、アジア再建の偉業に　神洲三千年の歩武を進めつゝあるとき、そのアジア諸民族の精神的輯帶として、我が皇國本來の統治經綸道に於ける道義的實力と相並んで、人間最奥の渴望を醫やし　その無限の心田を開拓して　實在不滅の佛種を植ゑ　平等救濟の慈光に潤はしむる　精神的無限の一大王國が、我及び彼等諸民族の心靈界裡に　建設せられねばならぬ。

光は東方より……人類の歴史と地圖とが更改せられ、新たなる文明の創造と　新たなる世界秩序の建設とが、世紀の巨歩として轉回しつゝあるとき、實に今日ほど　宇宙永遠の宗教的慈父たり師主たる　我が大聖釋尊の靈光が　遍く全人類の間に翹望せらるゝこと實に現代より切要なるは未だ曾て之有らざるを思ひ、而てその靈光が　この佛祖出現の靈地たるアジアの天に、再び新たなる世界史的意義を以て輝かんとするあるを思ひ、しかもこの大理想の實現こそ　實に我が大日本佛教徒の多難且つ光榮なる　一大天職たり使命たることに想到し、敢てこの一文を檄して　我が國佛教界の諸賢は固より、廣く江湖の先覺に寄す。冀くは天下卓識の士、須くこゝに明察するところあつて　速かに皇國永遠の教育國策を樹立し、以て精神文化の世界に於ける　我が國家品威の上よりするも、齊しく天業經綸の皇謨を恢弘するに至らんことを。更に請ふらくは我が佛門求道の君子、三度び思をこゝに致し、正に佛教の大理想を光顯して　虔んで佛祖の照鑑に應へ奉らんことを。

皇紀二千五百九十九年
昭和十四年二月　世尊入涅槃の聖月

佛祖法統愛護の正定聚

財團法人　統　一　團

漢詩

成島龍北

宸題　朝陽映島

旭日曈曨景象幽。靈光映發射滄州。
隆々帝德輝千古。興亞神等仰壯猷。

靈肉相通名力士

連勝驍名天下鳴。誰知蓮聖感應生。
將軍爲贈四文字。靈肉相通潑墨明。

横綱双葉山信日蓮上人　林銑十郎大將記四字
以贈故及

團扇皷中佐

昭和十三年十二月東京日々新聞報松谷磐中佐之勇名中佐深信日蓮上人之立正安國主義常唱七字之妙法蔡滿國境及各地轉戰傷於大別山之激戰受貫通銃創療養千葉陸軍病院　両退院直驍宮城前拜恵雨所臭感宣揚武蓮長久陣歿將士之冥福云

冰雨不關禁闕前。至誠默禱轉嚴然。
由來聖戰有安國。法皷鼕々頌日蓮。

誤　正

前號漢詩「其二」の初行下段に於ける「皇色」は「皇統」の誤植に付玆に謹みて訂正陳謝す。
——破部——

朝陽の映島

金子光和

乾立東方國　朝陽映八洲　彩雲敷萬里
瑞氣滿千秋　岳雪光途秀　汀煙影自收
皇威振禹域　普率仰鴻猷

小湊生誕

多年王室式微時　東海邊陳生鳳兒
立正破邪獅子吼　仰瞻本化大宗師

同

寶閣高臨東海湄　蓮花曾此映晴曦
靈光萬丈明煌赫　照破人天闇惑時

同

負山臨海一漁村　梵唄潮音淨六根
瞻仰祖師降誕地　千年法業跡長存

保健の要點（承前）

池田龍一

附錄

紫外線に就ての常識

「太陽の入る家には醫者入らず」といふ諺があるやうに、日光と吾々の健康との間には密接なる關係があるのであります。醫學の研究が進むに從ひ、益々このことを痛感するやうになりました結果、近來では、色々の疾病治療に當つて、この日光といふものを旺んに應用するやうになつたのであります。

日光が吾々の健康に甚だ有効なのは、色々複雜した作用によるのでありますけれども、主として働く處のものは、その中に含まれて居る紫外線と名づけられる光線の作用によるのであります。然るに吾々の文化が偏頗に進むに從ひ、近來、年々この紫外線不足による健康障碍の人が數を增して來るのであります。然も、この紫外線不足によつて生ずる健康障碍といふものは、成人よりも小兒、殊に發育旺盛なる時期の者程一層甚しいのであります。又個々の病氣に就て見ますれば佝僂病及結核病の如きものは、此の紫外線と最も密接なる關係を有する病氣であります。

紫外線が何故に必要であるかは、後段にこれを述べることに致しまして、先づ最初に、紫外線とは如何なる性質のものであるか、といふことの常識を述べさせて頂きます。

皆さん御存じの如く、日光といふものは、此處に圖示いたしますやうに、紫、藍、青、綠、黃、橙、赤の七種の目に見える光線と、眼に見えない他の光線とから成り立つて居るのであります。

これ等の光線は何れも波となつて、太陽から此の地球に向つて來て居るのであります。

然も、この光の大きさは、紫、藍、青、綠、黃、橙、赤の順序に漸次大きくなつて行くのであります。赤線よりも更に大きい波で、吾々の眼に見えない處のものを、赤外線（又は熱線）と名づけて居るのであります。紫線より更に小さい波で、

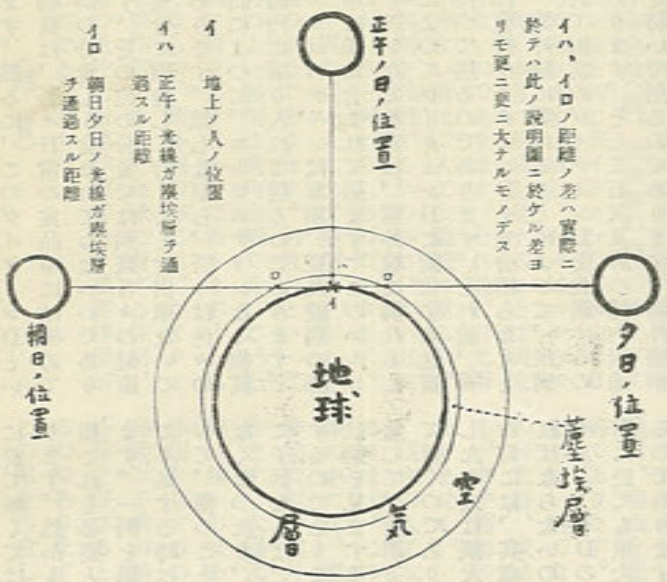
吾々の眼に見えない處のものを、紫外線（又は化學線）と名づけて居るのであります。これ等の太陽光線は、波の長さが大きくなつて赤外線に近づく程化學作用を失つて熱度を増し、波の長さが小さくなつて紫外線に近づく程熱度を失つて化學作用を増すのであります。

これ等の太陽光線と吾々との間に介在して重要なる役割を演ずるものは、地球を包む空氣の層であります。この空氣の層は地表に近い程多量の塵埃を含んで居るのであります。殊に都會地の如き、煙突の林立と交通の頻繁とがある處では、その上層の空氣は一層多量の塵埃を含んで居るのであります。

赤外線とか赤線とかいふやうな波の長さの大きい光線は、太陽から地上に到達する迄の間に於て、空中の塵埃、煤煙、雲霧などの邪魔を蒙ることが少ないのであります。即ち、波の長さが大きい爲にこれ等の雲霧煤煙塵埃等を乗り越えて地上に到達することが出來るのであります。然しながら、紫線とか紫外線とかいふやうな波の長さの小さい光線は、これ等の邪魔物の爲に吸收せられて仲々地上に屆くことが六ケ敷いのであります。このことは、吾々が朝日や夕日に向つた時に一番よく了解することが出來るのであります。

今、次頁に圖示いたしますやうに、吾吾が朝日や夕日に向つて居る場合の太陽光線といふものは、地球周圍の空氣層を長く通過しつゝ吾々の眼に達して居る處の太陽光線なのであります。それ故波の短い紫外線とか紫線とかいふやうなものは、塵埃、煤煙、雲霧等に吸收せられて吾々の處に到達する分量が非常に少なくなつて居るのであります。けれども、赤外線とか赤線とかいふやうな波の長い光線はこれ等の邪魔を受けることが少ない爲に、非常に澤山の分量が到達して居るのであります。それが爲に太陽は青白い色を失つて赤く見えるのであります。

正午頃の太陽の位置は、左の圖に示す如く、その光線が雲霧、煤煙、塵埃等の層を通過する距離が遙かに短いのであります。その爲に紫外線とか紫線とかいふやうな波の短い光線と雖も、これ等の邪魔を受けることが少ないのであります。從つて、この時の太陽光線は、夕日や朝日の光線の如く紫外線や紫線を失つて居ないのであります。それ故、この時の太陽は朝日や夕日の如く赤く見えないのであります。



斯の如く、太陽から地上にやつて來る紫外線の量といふものは、一日の中に於てもその時刻によつて大變違ふのでありますが、同じ時刻と雖も、都會の如き空氣の汚い處と、高山海濱の如き空氣の清澄な處とでは、大變な相違があるのであります。又、北陸東北地方の如き曇天の多い處と、瀬戸内海地方の如き晴天の多い處とでは、一年間に於ける紫外線の量といふものが非常に相違して來るのであります。佝僂病が、北陸地方殊に採光不良なる住家の小兒に多く發生し、瀬戸内海地方に於ては見ることが出來ないといふ事實は、この間の消息をよく物語つて居るものといはなければならないのであります。

此處に於て、聞いて頂き度いことは、紫外線とヴイタミンDといふ物質との間に於ける關係であります。若し吾々の體内にヴイタミンDが缺乏いたしますならば、吾々の身體には石灰質や燐質が少しも留まつて呉れないのであります。いくら石灰質や燐質を攝りましても、それは只身體を素通りしてしまふだけであります。即ち、ヴイタミンDと石灰及燐との

間には離るべからざる關係があるのであります。然るに、このヴイタミンDといふ物質は、吾々日常の食品中には極めて僅かの分量しか含まれてゐないのであります。その位の分量では到底吾々の健康を充分に維持して行くことは出來ないのであります。然しながら、吾々は色々の食品によつて、エルゴステリンなる物質を體内に攝り入れて居るのであります。

（エルゴステリンは茸類、豆及穀類の胚芽中に澤山含まれて居ます）このエルゴステリンなる物質は、紫外線に觸れることによつてヴイタミンDに變化する性質を持つて居るのであります。それ故、吾吾は直接ヴイタミンDを充分攝らなくとも、紫外線に觸れることによつて、皮膚に於て相當のヴイタミンDを生産するのであります。そして石灰及燐の體内素通りを防いで居るのであります。紫外線が保健上大切なる所以の大半は此の點にあるのであります。

この石灰及燐は、啻に骨や齒に對する基本的物質であるのみならず、身體各所に於て無くてはならぬ重要物質なのであります。然かも、發育旺盛なる時期の者程これを必要とすることが大なのであります。一例を擧げて申せば、これが體内に不足する時は、體質は非常に過敏になつて、僅のことに疲勞したり、熱發出來なくなつたり、嘔吐し易くなつたり、更に子供ならば、痙攣を起し易くなつたりするのであります。又、結核が治癒する狀態を見まするに、其處には石灰質が沈着して、所謂セメント固めの狀態になつて行くのであります。故に、結核が治癒したり或は擴大しないで濟むといふことの爲には、其處に石灰質の沈着を見なければならないのであります。從つて、ヴイタミンDの存否といふことは、この點に於ても重大なる關係を持つことになるのであります。即ち、紫外線に觸れるといふことは、身體を頑健にし、結核に對する抵抗力をも增大する、といふ結果になるのであります。

然るに、今、一般人間の健康狀態といふものが如何なるものであるか、といふことを嚴格に調べて見まするに、「結核菌の侵入を受けて居ないものは殆ど無い」といつても好い程の狀態にあるのであります。只、問題とする處は、その程度の輕重だけであるのであります。これ等の狀態が何によつて生じたかといふことは一言にして斷ずることを許されませんけれど、その主因は大體二つであらうと考へられるのであります。即ち、その一つは、交通の頻繁に伴ふ人と人との直接間接の接觸による結核菌の吸入であり、他の一つは、文化の偏頗なる進歩に伴ふ紫外線不足と榮養不良とによる抵抗力減弱であらうと考へられるのであります。

斯く思ひ來る時は、吾々は努めて日光に當るやう心掛くべきことを痛感するのであります。從つて、日光に觸れることの出來ない狀態にある者は、何とかして時々でもよいから、人工太陽燈による紫外線浴を行ふか、或は、ヴイタミンD製

劑を服用するかして、保健を計らなければならないと思ふのであります。

エスキモー人が日光に當ることなくして健康を保つて居るのは、鮫等が多量に食する魚油（鱈、聖魚等の油）の中にヴイタミンAと共にヴイタミンDが澤山あるからであります。然し、吾々はエキスモーの如く多量に魚油を食することは到底出來ないのであります。それ故、日光浴の出來ない者は、人工太陽燈に當るか、或は製劑を服用するかの外に、よい方法はなからうと考へられるのであります。然し、胃の弱い人には、製劑はどうも不適當のやうであります。何故かといへば効力のよい製劑は兎角油劑であつて、その爲に胃を害するからであります。それのみならず、紫外線の方には、ヴイタミン形成作用の外に、血球に對する作用、皮膚の抵抗力增進作用等色々重要作用があるのであります。

（附　言）

日光浴（紫外線浴）が健康上大切であり殊に結核治癒に有効であるからといつても、無闇矢鱈の日光浴は却つて害を及ぼす場合があります。即ち、熱のある場合日光浴をいたしますと、熱が增したり、或は、喀血を誘發したりして、却つて有害であります。日光浴をする場合は常に熱のない時でなければなりません。病後の日光浴、或は、熱のない病人の日光浴も、必ず醫師の指導のもとにしなければなりません。

現在の人工太陽燈は大概水銀石英燈であります。この水銀石英燈から出る紫外線の中には、遠紫外線と名づける波長の非常に短い紫外線をも含んで居るのであります。太陽光線の中には、この遠紫外線は無いのであります。遠紫外線は破壞作用を有するのであります。それ故、虚弱質の子供が無闇矢鱈に水銀石英燈の紫外線を浴びるといふことは、却て疲勞するのであります。それでありますから、この點を注意して度を越さぬやうにしなければなりません。何といつても自然の太陽より良いものはないのであります。

ヴイタミンAに就ての常識

ヴイタミンAといふ物質は、ヴイタミンDと共に、吾々の保健上非常に重要なる働きをするものであります。これを一口にいへば、ヴイタミンAは、吾々の發育を旺盛ならしめ且つ抵抗力を強大にし病氣の治癒力をも強大にするものであります。これ等の數多い重要作用の中でも皮膚や粘膜の抵抗力を強大にする作用はその最も大切なる作用であります。即ちヴイタミンAが缺乏いたしますれば、吾吾の皮膚や粘膜は、雜作なく細菌を中へ侵入させてしまふのであります。それ故いくら消毒をして置いても、わけなく敗血症や產褥熱や丹毒の如きものを起したり或は、ヒョウソやヨウやチョウや其他の皮膚病に罹つたり、肺炎や中耳炎や傳染病の如きものをも容易に引き受けたり

結核に對する抵抗力をも弱めたりするやうになるのであります。それのみならず一旦罹つた病氣や傷は仲々治らずして、却つて惡化して行くことが多いのであります。又、姙婦に於てこのヴイタミンAが缺乏いたしますれば、胎兒の發育は止まつて流產し、授乳婦に於て之が缺乏いたしますれば、乳兒は發育せずして漸次體重が減じて遂に死亡するのであります。缺乏とまでは行かなくとも、これが母乳中に不足すれば、乳兒は脂肪を消化吸收する能力が益々なくなつて、下痢し易くなり、發育は不良となり、色々の病氣に罹り易くなるのであります。夜盲症や、夏の子供の長い下痢（福島地方でいふ瘧氣）や、麻疹の後のひどい眼病などは、このヴイタミンAの缺乏のよい例なのであります。

このヴイタミンAは發育上非常に大切なものでありますから、大人よりも子供就中幼い者程澤山の割合に必要なのであります。それ故、姙婦や、乳香兒を持つて居る婦人は、幼兒と同樣に、澤山の割合に必要なわけであります。

このヴイタミンAは、動物の肝臟の油殊に鱈や鯊魚の肝油中に澤山含まれて居るのであります。其他、卵黃や牛乳やバタ等の如き動物性脂肪の中にも少し宛有るのであります。然し、飼育動物の油の中に含まれて居るヴイタミンAの量といふものは、その飼料によつて甚だ異るのでありますから、一口にいふことが出來ないのであります。

バタなどは、從來、比較的多量のヴイタミンAを含んで居るとせられて居たのでありますけれど、一般市販のバタに含まれて居る分量は、仲々少量でありまして、肝油に比すれば、物の數にもならぬ程しかないのであります。それ故、確實にヴイタミンAを攝る爲には、どうしても、肝油を用ゐるより他によい方法がないのであります。然し、油類は總て胃を害し食慾を惡くいたしますから、油分が少くてヴイタミンAの量の多いもの、即ち、高級肝油やヴイタミンA製劑を用ゐるのがよいのであります。

以上の如く話して參りますと、ヴイタミンAは植物性食品の中には無い、といふやうに聞えます。又、實際に於て、植物界には直接ヴイタミンAはないのであります。然し、青菜殊にホーレン草や青豆や人參や南瓜や黃玉蜀黍やトマトの如き黃色の色素を澤山含んで居るものを食べる時は、この黃色のカロチンと名づける色素が、肝臟に於てヴイタミンAとなるのであります。それ故、吾々は動物性脂肪によつてヴイタミンAを攝らなくとも、植物性食品によつてカロチンを攝れば、同じ結果になるのであります。然しカロチンは、ヴイタミンAの十分の一にしか相當しない、といはれて居ります。それのみならず、姙娠中の女性の肝臟に於ては、このカロチンをヴイタミンAに變へる能力が極めて微弱だといふことであります。それ故、姙婦が好い發育の胎兒を得んとするには、やはり、肝油、魚

鳥の臟物、鰯、鰌、スジコ、上等の卵、上等のバタ、鰯、鰊等動物性食品よりする脂肪によつて、直接ヴイタミンAを攝つた方が合理的であるわけであります。

然し、前にも申しました樣に、胃腸の弱い人が、殊に夏季に於て、油性のものを多く攝れば、食慾を害して他の食物が食べられなくなるのみならず、折角攝つたヴイタミンAも吸收せられずして、充分の効果を擧げることが出來ない場合があるのであります。それ故、これ等のことは人々によつて一樣に行かぬ、といふことを心得て置かねばならぬのであります。これと同時に、夏季に於ては、兎角淡泊なる食物を食べる傾となる爲に、吾吾はヴイタミンAの不足を來し易い、といふことをも心得て置かねばならぬと思ふのであります。猶、ヴイタミンAとヴイタミンDとは、共に、煮沸して居る湯（味噌汁、煮物）の中位では壞れないのであります。又、アルカリに對しても、共に、相當强い抵抗力を持つて居るのであります。然し、酸に對しては、それ程强い抵抗力を持つて居ないのであります。又、沸騰して居る油（攝氏二百五十度以上）の如き高溫の中では無論壞れてしまふのであります。それ故、天ブラの表面や燒肉燒魚の表面などでは壞れるのであります。又、バタでいためる時は、バタの中のヴイタミンは壞れるのであります。

このヴイタミンAとヴイタミンDとは、兩者互に相倚り相扶け合ふ性質を持つて居るのであります。即ち、Aの不足の場合に、Aだけを單獨に與へるよりも、AとDとを混合して與へた方が遙によくAの作用を發揮するのであります。これと同じく、Dの不足の場合に、Dだけを單獨に與へるよりも、DとAとを混合して與へた方が遙によくDの作用を發揮するのであります。それ故、混合して用ゐる時は、小量を以て充分の効果を擧げることが出來るのであります。然るに單獨で用ゐる時は、大量を以てしても其の割に効果が擧がらないのであります。この關係は、實にヴイタミンAとヴイタミンDとの間に於けるばかりでなく、總てのものゝ間に於てそうらしい、といふことが追々解つて來つゝあるのであります。これ等を以て見ましても、吾々は、複雜食の有難さを知り、單純食の不可なることを知るのであります。即ち、時代は既に從來のカロリー榮養學時代を去りつゝあるのであります。複雜食をして、日光に當つて居れば、ヴイタミンなども改めて澤山攝る必要はないのであります。

（附　記）

卵黃は黃色が强い程ヴイタミンAが澤山含まれて居るのであります。鷄に青菜を食べさせないと黃色くならないのであります。又、同じく青菜を食べさして居ても、日光に當らぬ鷄の方の卵黃は黃色が薄いのであります。即ち、生物は、日光に當ることによつて、體內に於けるヴイタミンA形成にまで影響を受けること

を知るのであります。然し、生きて居る體内以外にあるヴイタミンAは、ヴイタミンDと異つて、直接日光に觸れる時には、壞れるのであります。空中の酸素に觸れても壞れるのであります。それ故、食品を乾物にすれば、エルゴステリンが紫外線に當る爲に、ヴイタミンDは增しますけれど、ヴイタミンAは（カロチンも亦）減つてしわふのであります。

ヴイタミンA製劑
（一）油性のもの
ビオステリン（理研）
ゼコラミン（日本新藥）
ルメノン（ラヂウム製藥）
ヴイタミンA球（理研、三共、日本新藥、日藥、ラヂウム製藥）
肝油ドロップ（消化し易し）
デタビツト（消化し易し。バイエル）
注射用
内服用
ヴイタミンDをも含む
（二）非油性のもの
ガロステリン（鹽野義）ヴイタミンDを含まず
ヴイタミンD製劑（ヴイタミンAを含まず）何れも内服
（一）油性のもの
オヴオラール（藤澤）
ヴイタミンD（理研）
ヴイガントール（バイエル）
（二）非油性のもの
オリーゼ（乾卯）

（大槻）

お題目に關する信仰意識

磯部滿事

二月は、日蓮聖人のお產れになつた有意義の月である。釋尊の御教は、末法に入つてから、日蓮聖人に依つて彌々その心髓が發揚されたのであつた。其の事は經文を拜すれば明々白々の事實で、奇蹟と申せばこれ程大きな奇蹟はない。全く有難い事である。

法華經を拜讀して見ると、釋尊の御在世は佛智を以て大衆を御化導遊ばされてゐたが、御入滅後、時代が漸次經過して二千年以上も經ると今度は、釋尊の每自の大慈悲と、私共の正意誠心の精神的結合で救護されることになるのである。そこで法然上人にしても念佛の一行に依り、いかな惡人でも罪業の深いものでも、それで救はれるといふ極めて入り易い解りよい信仰を唱へ出されたのであつたが、日蓮聖人も、行じ易いお題目の信念口唱を呼ばれた、けれどもその意味合は大に違ふ。御佛の教を頂かんとする者は須く教主釋尊を忘れてはならぬ、佛教はこの釋迦牟尼佛の御教であることは誰れも異論はない筈である。それを釋尊は印度の歷史上の佛陀で、阿彌陀佛はそれよりも古い理想佛であるから、釋尊よりも尊いのだといふやうなことは、經文を曲解せるものであつて、歷史上三千年前、印度に御降誕下さつ

た釋迦牟尼世尊こそ、それが直ちに無始久遠實成の大思教主釋迦牟尼如來であるといふことを、下方の空中から非常召集して、大昔から化導されてゐた大菩薩達を眼前に列席せしめ、事實を以て釋尊の大宇宙唯我一人の權威を明かに示され、而して始めない始めから終りもなく永久に、一切衆生を救濟されつゝある大佛事を詳細に述べ、玆に釋尊とは如何なる佛で、どんな事をしてゐるかといふことを率直に大衆に見せつけられ、且つ私共の功利的な慾深い煩惱に充ちた淺間しい心境から一轉して法悅歡喜の生活に入らしめる爲めに、その御自身の量りない絶大な功德の結晶を妙法蓮華經の五字一音として讓り與へられたのだといふことを憶念せずばなるまい。

釋尊の使たる日蓮聖人が、大膽な一切經から、斷然その中心をなす釋尊の御精神と拜すべき法華經を、法華經から更に々々妙法蓮華經の五字を要中の要として指摘された事は、同じ易行道であつても、同じ信心の宗教であつても、法然上人の彌陀念佛とは內容に於て大きな距りがある。故に南無妙法蓮華經は一見簡單で狹い樣だが、それは實に深く廣いものである。ある人は南無妙法蓮華經は日蓮聖人の獨創かと問はれたが、日蓮聖人は決して自見を振り舞されることはない、卽ち、本師釋尊に最も忠實な本化のお弟子であつた。隨つて常にその一擧一動は、經文に基いて終始されてゐた、寔に日蓮聖人程正直で素直な强信の人は無類であると思ふ。

そこで南無妙法蓮華經の御題目の意味合は、本多上人も每度申された通り、『南無』といふ二字は梵語であつて意味が種々あるから漢譯されずそのまゝ用ゐられてゐるが、その一つ二つを擧げれば、「歸命」とか「歸依」とか、「度我」とか申して誠心を捧げ信じ任せて行くことなので、「一生懸命」ですといふことになる。それから次の『妙』とは『法』を讃めた稱歎の辭だといはれて居る。然らばその『法』とは何か、これが中心である。此の點を最も大事とし、これをよく意識せぬと誤解が起り、所謂眞理が根本で、佛も眞理には叶はぬ、眞理とは法なりといふ獨斷に陷り易い。

宗教の本質が、佛樣のこととと、人間のこととと、この二者の關聯せる宇宙のことに歸結するといふことは識者の已に一致せる意見であり、それは矢張り經文から出て居るものである。此の宗教の本質を『法』の字で表はされてゐるので、そこに法は空虛のものを指したのでもなければ、非人格的な、冷かなものでないことが知られる。本多上人は『法』を論ずる場合には少なくともそれは、果法か理法か人法か敎法か行法かとの五つを押へてかゝれ、法と佛とはどんな關係かといふ問題を論ずる時にも、その法とは何ぞやといふことを明瞭にせぬと或は大きな煩累を來たすことになると敎へられた。

さて人間といつても心が中心となるが、この我々の心を能く觀察すれば、佛樣と同じ心もあり、餓鬼や畜生と同じものもある、一の心であるが實に千變萬化極りない不可思議なものなんである。仰いで佛樣を拜するに佛樣は申す迄もない大きな慈悲の御意で自在に大衆を濟度される、所謂如來秘密神通之力を現されてゐる。又宇宙全體のことを考へても、そこには相互に微妙の關係を有つて、始もなく終りも

なく實在するものといふことになる。哲學的に理論で行けばこれ等は極めて幽玄な、最後は口に述べることも、心に計ることも出來ない微妙なものが『法』であるから、そこで是を稱歎して『妙法』といふことになる。けれ共そこに押へ處はないかといへばある、卽ち日蓮聖人は、三の中の佛樣をたてられた。この佛樣の衆生を濟度せられる力の中から出て來る妙法でなければ、自分の考へから出て來た題目では救ひの力はない譯である。こゝは大事な點であるから間違はぬ樣にしたい。自分こそ佛であるとか、自分があつて始めて一切のものがあると思ひ、自分の心を妙法と名づけた所が、それで救はれる理論は少しも出て來ない、內在の神に力を入れて、外界に佛神を認めないものは、日蓮聖人の敎に浴せぬ者で、聖人の信仰意識は『仰ぐ所は釋迦佛、信ずる法は法華經』といふことがハキッリしてゐる。

次に『蓮華』とは、その法を譬へたものなんで、法の上に於ては意味深長であるが、重點は因果同時といふことを取つて、爰に蓮華は花の咲いた時、旣に蓮臺の中に實があり、實の中には芽がある、因果同時である。普通には因果の關係が時間的に現はれて來て、迷へる人間も遂には悟れる佛になる、佛も素素凡夫だといふことになる。それが事實なればその當初には佛はなかつた、迷へる九界の衆生ばかりで十界の義は成立せず從つて成佛論も根抵から破れてしまふ。日蓮聖人の主張される法華獨り成佛の法といふことは、何としても有難い事である、妙法の妙法たる所以、實に妙法蓮華の意義は究むれば究める程高く貴く深い。『蓮華』のモー一つ有難い敎は、蓮が汚い泥中にあつて而かも之に染まず淸淨の華を水上に咲かせてゐることである。私共の日常生活を見ると周圍は俗臭プン〳〵であつても、其中に惑溺されずして立派な人格の光を薰らせること蓮華の如くでありたい。

『經は』さういふことを敎へられた佛典であることをいふので『聲佛事を爲す』といつて、釋尊の御說法で、か樣のことを敎へられた經典といふことになる。

本多上人は、日蓮聖人が『南無妙法蓮華經』とお唱へになつたのは、この佛樣の所から出て來るのであつて、佛樣は自在神通の力を以つて吾等を導いて行くことが出來る、これが法華經の中心思想だと仰せられてゐる。されば妙法の唱題は、釋尊を感應主と仰いで、その釋尊の御功德、御力用を受け繼ぐ所の題目としてこれを考へて行けばよい。隨つて私共が壽量の釋尊を憬がれ、その留め置かれた妙法一粒の良藥を服する時に、佛の種を植付けて貰ふのである。

換言すれば私共唱題する意識は、理窟を捏ねる爲めではない、畢竟常樂我淨の佛身を成滿せん爲めであらう。本佛釋尊大覺の妙法は幾多迹佛さへも思慮に及ばない、何に況んや菩薩凡夫をやであるが、我等の一念に之を信ずるに於ては、信念により忽ち、佛樣の妙智の境界に至るのである。何故かなれば我等に隨喜渴仰の相を以て、張り切つた滿たされた法悅の性により、金剛不動の信心に住すれば、貪瞋痴の煩惱もこれ忽ち佛界中の九界である、所謂因果俱時の理から成佛の妙悟となるに到る譯なんである。故に南無妙法蓮華經の唱題は、如來壽量品に說かれてゐる通り、本佛釋尊の未だ曾て暫くも佛事を廢せず、

つねに自ら是の衆生救濟の念をなす、その爲め今此に八萬四千の法門を擯き從ひ和合して唱へ易き妙法蓮華經の五字として遺しておく、汝等はこれを信じ唱ふる時に、精神的にも肉體的にも向上の一路を辿り、自分と等しく異らずと懇說された佛樣の懷に飛び込めばよい。日蓮聖人の觀心本尊抄に仰せられた「釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等この五字を受持すれば自然にかの因果の功德を讓り與へたまふなり」と、そこに信仰意識の秘訣はあるのでないか。

多くの人は信仰と祈請を混同してゐる、勿論祈願は信心から起るだらうが、信仰は一念隨喜の心からであり、祈願は求むるものあつての心から起る、そこを間違はぬ樣正しい精進を勵んで行きたいものである。どうも日蓮宗といへば御祈禱宗のやうに思つて居る人が世間に多いが、日蓮聖人御自身には「日蓮は少きより今生の祈なし、只佛にならんと思ふ計りなり」と晩年身延から强信の四條さんへの告誡御書に明瞭に仰せられてゐる。心得べきことであるまいか。

時代が逼迫すればする程、迷信や俗信が橫行するが、私共は飽迄も　日蓮聖人のお手本に從つて、その御意を出來る丈け承繼し延ばして行くことが、この御聖誕月に當つて强く願うたるゝ所である。

南無妙法蓮華經

記事

本部團・報

元朝會　昭和十四年己卯戰捷の元旦を迎へ、本部に於ては、昨年同樣午前九時より階上の御寶前に一同拜跪合掌して至心に正法興立、皇道繁榮、國運隆昌、時難克復、萬民快樂の爲めに熱禱を捧げ、上田理事長始め同心會池田會長其他有志團員各位の年賀交換もあつた。

國禱會　吉例に則り正月七日午後二時より、整備された講堂に於て、戰捷新春の國禱會並に陣歿諸氏の慰靈祭を嚴修した。快晴の氣持ちよい此の日、虛禮廢止質素堅實に一同彌々緊張しつ誠心から意義深い法要を嚴修して後、二時四十分頃懇談會に移つた。

礒部常任理事先づ開會の挨拶あつて後司會者となり、上田理事長より現下の國情を經濟上より鋭いメスを以て解剖的にその所信を披瀝され、本年の難關突破に對する一大警聲を發せられ、小林一郎先生は若干御風氣の中をば特に吾等の爲めこの意義深い淸集に御臨席あつて、靜かに年頭に於てお互の精神上に金剛不壞の覺悟を促がされ、殊に兩三日後には御入營なさる御令息に對するお別れの激勵の一言と共に、先生の銃後の悲壯な御決心を聞いて大衆は甚深の感激を與へられた。議議な雨龍炭礦の荻野專務さへ、その拵へ切れない肝銘を、往年御令息を喪はれた丈けに一層强くお感じになつて一言の御告白があつた。

昨年は小西日喜師の熱辯を傾聽したが、間もなく二月の御不幸から洵に心淋しい感がする、併し幸に山口智光師の張り切つた御感想、乃木將軍の學習院生徒に對する最後の日本觀に就ての訓戒を以て、日蓮聖人の三大誓願と共に此際に於ける有益なお話が述べられ、次いで河合陟明氏は法と國とに就て組織立つた論述から、本團の使命の重大なことを詳說し、その火の如き無礙辯に一同を魅了し、將に閉會に終らうとする直前、井上淸純男は極めて御繁用の中を特に馳付け下さつて、この國步多難の潤に臨む吾等の採るべき唯一の道、それは皆が心を一つにして佛天に祈請することであると思ふと熱涙數々双頰に傳ひ、滿堂は肅然として靜寂襟を正した。時に五時二十分、此の日中村理事や、池田同心會々長、和賀議介氏其他本鄕日常氏等を始め約七十名の中から、幾多の御感想を拜聽致したかつたが、日沒後寒氣もつのり、横濱や浦和等遠路の方々もあり旁閉會に決し、井上男の主唱にて萬歲和唱散會。有志は其後會議室で護法愛國談に華が咲いて八時半頃まで懇談。

當日　本郷氏の即興數首

天皇の稜威の下に日の本の
光は四方に輝けるかな。

新玉の年を迎へて日に月に
東亞の大業成るぞ嬉しき。

聖戰の下第三年の新春に
同志の誓ひ固めてしかな。

寒行會　正月六日から本部に於て午前六時半より立正寒修行が營まれ、妙法蓮華經一品宛訓讀、後唱題正行に入り七時半終了、從來毎月三回宛の法華經續講に、この今回の企ては時節柄特に重大の意義あることであるから、同心會及び酒悅立正青年團も等しく隨喜參加され階上滿員である。新市街の荻窪や大森などの遠方からも勇敢に寒風に晒されつゝ曉天氷の道を踏んで來られる、殊に浦和からも參加されて感歎してゐたが、更に須田君の如きは埼玉の久喜から三時の汽車で毎朝通はれることを承つて涙なくしては迎えられない有難さである。正しい信念のいかに力强いものであるかを痛烈に感ぜしめられる、この心持ちで終始される日常こそいふ迄もない菩薩の志願力、善根力、成佛道と思ふ。それから毛色の變つた處では、野口氏が毎朝の道中を電車で空費するは勿體ない、一人でも毒藪の緣を結ばせてやりたいものだといふ大慈悲から、指ケ谷と音羽の道中一時間を尺二寸の團扇太鼓勇ましく轟かせつゝ、汗一ぱいで外套もなく愉快さうに往復されてゐる。そこに二三の結緣者もあり、感涙の浮財喜捨もあつた事も本年の一偉彩である。

妹尾氏や椎名氏が聲の出なくなる迄、熱心に勵んで居られることを見ては自ら合掌せざるを得ない、而して池田會長の底力ある太い梵音が、唱題行に入るやそれこそ衆唱に一頭地を拔いて爲めに大衆益々鼓舞勇奮、會館も張り裂けさうな壯絕の光景は恐らく天下無類の嬉しい淨行で、これが一朝二朝十朝二十朝でなく、寒三十日打續くことは流石非常時風景の第一の賜ではあるまいか、こゝに佛天の加被の有難さが泌々と肝に銘ずる。

勤行後打揃つて白粥をば、食法偈を唱へて戴いた時、實に名狀の出來ない心境である。大勢の食事萬端を一人の手で四時起して働く陰れた嬉人も尊い菩薩行で、勤修者の功德に敢て劣るべきではない有難い事共である。私共は寒修行後と雖も、この氣持ちをば持續したいものである。

御書講座　日蓮聖人の立正安國論講義は一月十日から、小林先生に依つて續講されてゐる。一、二月は夜分殊に寒いとはいふものゝ、北支滿洲の皇軍の勞苦を偲んで、吾等は眞劍に道を求め、正しい敎を以て國家の興立、世界の共榮に邁進致したいものである。一局部の問題に傾かず、天下の大勢を達觀してこれに善處せんとする處に、大聖人の御敎は與へられてゐると思ふ。御精進を祈る。

同心會報

元旦參拜　午前五時、池田會長邸に參集、先づ御寶前に恭しく國禮會を嚴修し、終るや否一同省線に運ばれて、明治神宮に參拜した。折柄初日の出を迎え、進んで社殿の前線に一同整列、至心に唱題し奉つた。混雜の群にもお互の隊伍を亂さず、代々木驛から東京驛に降りて皇居に向つた。身に泌む寒風をついて進軍歌を、酒悅立正青年團員と共に高らかに謳ひつゝ二重橋に到り、二列横隊となつて、恭しく唱題、最敬禮聖壽萬歲三唱して散會自由行動に移つた。その一部は家路に一部は勤務先へ、一部は統一會館へと向つた。

福岡班長歡迎　會員福岡駒雄氏が昨春、種村五郎氏と北支宣撫官として赴任以來、同氏は山西の臨汾其他最前線に宣撫班長として活躍し、食ふに米粟なく、臥すに床座なく、泥濘全脚を沒して一里に五時間を費し、百三十度の炎天下、蚊蠅蜈蚣諸蟲と惡水等の强敵とも戰ひつゝ、不眠不休の想像だも及ばざる苦闘と多くの危險に往復し、僚友の死屍を越へつゝ、以て彼等民衆唯一の撫育甦生の重任を全ふし、昨冬北京本部詰となり、今回藤井班長補佐、他に二名の同僚と共に宣撫員採用の爲め上京され、殆んど寸暇なき日程中より、特にお互の交誼に謝ふべく、一月十六日三晝夜の不眠をも事とせず、池田會長邸に來駕、先づ御寶前に報告式典を營みそれより池田會長歡迎の辭に對へて簡結に挨拶し、後會員の二三質疑應答等時の過ぐるをも忘れ、食事を俱にしつ、やがて田中先生の慰勞感謝の言葉あり、和氣靄々裡にお別れした。この宣撫の淨行がいかに至難であり、多大の犧牲を拂はねばならぬか、又日支提携にどれ程重大な役割を持つものか、等々の事柄に就ては未だ一般に理解されてない樣にも思はれる。本會が昨夏八木沼總班長を迎へた時、『宣撫班を語る』と題してお話し下さつた、その要旨が九月號の本誌に揭げられ一部の人達に知らしめたが、此際モツト廣くこれを國民に徹底せしめて、有爲の人々の奮起を望んでやまぬ、武力戰に引續いて直ちにこの宣撫工作が行はれねば、その目的を達成するに至るまい、以つてどれ程重要な仕事であるかの一端を窺はれるであらう、併しそこには命も名も金もいらぬ健全な身心の持主を要求されること申迄もない、所詮妙法强信の人に俟つ、所謂不輕菩薩の二陣三陣と出現されんことであると思ふ。

毎月例會　實業家であらうが、技術家であらうが、銀行家であらうが、爲政家であらうが、さては學者でも軍人でもすべて人は先づ正意誠心でなければならぬ、その正意誠心でありたいならば、この天地大宇宙に對する敬虔の情操を養ふこと、そこに宗敎の信仰に覺醒することである。人が一度宗敎

の正しい信仰の妙味を識るならば、所謂法悦歡喜の心が勃然として湧き出て、眞の幸福、滅びない惠に浴しそこに正義觀に蔚えて元氣は充實し能率は增進して事業目的の達成を見るのである。本會は池田會長の至純熱烈な護法道念に誘導せられ、毎月三回、磯部、田中の兩氏を中心にして、妙法華經並に御遺文の講義が晩六時頃から勤行後續けられ、回を重ぬる毎に各員の信解增進の顯著なるを見うけることは、法國の爲め御同慶に堪えない。本年は一層相互異體同心、以つて會名に羞ぢぬ御精進を祈る。

大日本立正會報

元朝會　立正會館が昨秋の風と水で相當の被害をうけた、けれども小澤、笠間、夕田等の篤信護法の幹部に依つて、大修理と共に一部改造が施され面目一新の歡びと共に、昭和十四年の元朝會が一日の午後二時から本部に營まれた。導師に和賀上人をお願ひして立正青年團及び如月婦人會等の熱禱に、小西上人御遷化後の淋しい中からもある力强さを感じた。

初例會　平年なれば十六日に新年會が營まれて來たのであつたが、本年は御遷廬申上げて服喪の新年初例會を十五日日曜日午後二時から本部に開催し、磯部團長の年頭に膺りての挨拶に次いで、柴田、橋本の兩團員役員の感想談、引續いて鈴木上人や和賀上人の法話を拜聽して五時小澤幹部の閉會に結ばれた。來月三日は小西上人の第一周忌祥當に付法要が營まれ墓參の豫定である。

横濱法悅協會報

寒行會　過去十餘年に亘つて寒三十日、毎晩各會員の家庭を夫れ〳〵御寶前に修法、終つて法話の順序で、磯部先生の御參加を願つた、勿論御缺席の節はお互の會員相互に精進してゐる。信心は兎角に懈り勝になり易い、そこに正しい仲間と共に俱に勵ましあつて、かゝる時機に修行を勵みたい。

福島支部報

一月十四日(土)　國步愈艱難なる昭和第十四の初春、多忙にして席の暖まるを知らざる磯部先生を迎へ、初例會を生徒集會所に開く。吉松先生、高橋先生を始めとして會する者十九名であつた。本日はお釋迦樣の法華經に比すべき日蓮上人の開目抄に就いてお話を戴いた。先づ佐渡の御生活のお話に嚴冬の寒さを忘れ、取つて置きの聖人の御主張を佐渡の雪中に著はされた理由、及びその要點たる統一の思想、上行菩薩の御自覺、上人滅後の我々の爲にお殘しになつたといふこと及び佛樣の感應は必ずあるといふ四點、それから內容に入り主師親の人格を具へられたる絕對人格者を認めることの必要、佛教の卓越せる所以、乃至三大誓願等々說明されて私達が今の時局に處するには、日蓮上人の如き確乎たる信念を持つべき所以を諄々と諭され、信心の益强盛なるべきを促された。先づ新春に良いことをしたといふ氣分で滿され五時半散會した。

同日夜　七時より大町中村樣方にて支部初例會を開く、會する求道者二間に滿ち、和やかな讀經唱題に始まり、先生は先づ春初御消息を讀まれた。木に花の咲くが如くといふので良い氣分になつてゐると、お話は一轉して「物を知るは憂ひの初め」といふことから、眼に觸れ耳に聽くもの一として憂ひの種ならざるはない今の世の樣は、昔日蓮上人が立正安國を叫ばれし當時と同じく、若し此狀態が其儘推移すればどんなになるかは見え透えてゐるもう議論のときではない實行の時である。而してその實行とは正しき信仰を國民に與へることであり、この道以外にはないと極論され、且つ信の德を賞揚され、如何なる大事出來しても退轉してはならぬと敎へられ、今國家の安泰を祈る責任は實に私達にあり、それ故私達は正定聚に入つて他に模範を示さなければならぬと私達の決心を促された。隨分名殘惜しかつたけれども法國の爲致し方なく先生の多忙を謝しつゝ、中村樣の初例會お祝ひの菓子を頂き九時十分散會した。

圖書誌料維持費及寄附金領收

（自昭和十三年十二月十六日 至昭和十四年一月二十日）

一金貳圓五拾錢也	鹿兒島	松本みや子殿	
一金參圓也	山口縣	荒木ツル殿	
一金四圓拾貳錢也	千葉縣	本蓮寺殿	
一金壹圓貳拾錢也	福岡縣	秋山照代殿	
一金貳圓貳拾錢也	東京	吉田かつゑ殿	
一金貳圓貳拾錢也	中津	本傳寺殿	
一金六圓也	東京	市川箔十郎殿	
一金壹百圓也	同	同谷心會殿	
一金貳圓四拾錢也	同	土屋喜久殿	
一金貳拾圓也	同	柴田武治殿	
一金拾六圓貳拾錢也	同	順道會殿	
一金拾五圓也	同	酒悅立正青年團殿	
一金貳拾圓也	同	井上道太郎殿	
一金貳圓五拾錢也	高岡	畠山友次郎殿	
一金貳圓五拾錢也	福島	永井節子殿	
一金貳圓貳拾錢也	愛知縣	中村新次郎殿	

一金五圓也　東京　大島良太郎殿
一金參圓也　同　箕輪三郎殿
一金參圓也　同　加藤重太郎殿
一金拾圓也　同　平井三造殿
一金參圓七拾五錢也　基隆　高橋日應殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　木村日香殿
一金貳圓也　廣島　紀野日事殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　富田清子殿
一金參圓也　東京　中島卯三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　福島　渡邊雄吉殿
一金參圓也　東京　蓮池完靜殿
一金貳圓貳拾錢也　靜岡縣　石井日省殿
一金參圓也　東京　伊藤わか殿
一金六圓也　同　池田悅太郎殿
一金六圓也　同　和賀謙介殿
一金拾貳圓也　同　小峰豊子殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　中村幸吉殿
一金貳圓五拾錢也　同　西村喜勢殿
一金貳圓五拾錢也　埼玉縣　高山春男殿
一金五圓也　同　繁田哲四郎殿
一金拾圓也　東京　渡邊嘉也殿
一金參圓參拾錢也　横濱　久保田英樹殿
一金四圓四拾錢也　釜山　池田金作殿
一金拾圓也　濱松　大塚浪子殿
一金貳圓五拾錢也　兵庫縣　魚角量吉殿
一金六圓六拾錢也　富山縣　賀久嘉藏殿
一金七圓貳拾錢也　東京　大谷權次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　富山　石原重太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　福島縣　原事明殿
一金壹圓貳拾錢也　岡山　橋原荒治殿
一金貳圓五拾錢也　福島　夏谷江南殿
一金貳圓貳拾錢也　豊橋　妙圓寺殿

右難有領收入帳仕候也（以是代領收證）

財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖話錄　改版　特價送料共　金壹圓八拾錢
法華經要義　題天覽　仝　金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓　仝　金壹圓五拾錢
日蓮主義精要　仝　金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰　仝　金拾五錢
法華經要品　仝　金五拾錢
日生上人レコード（四面）　仝　金參圓廿五錢
日蓮聖人　仝　金拾錢
本尊意識に就て　仝　金貳拾錢
釋尊の八相成道　仝　金貳拾錢
法華經の心髓　仝　金壹圓五拾錢

機部滿事謹譯
本多日生上人　特價送料共　金壹圓七拾錢
動行作法　仝　金拾錢
佛教の心髓　仝　金壹圓

河合陟明著
皇道と日蓮主義　定價送料共　金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人　統一團出版部
振替東京九四二〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十四年一月二十八日印刷納本
昭和十四年二月一日發行
（第五百二十七號）

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人　礒部滿事
東京市四谷區內藤町一
印刷人　山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人　統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

佛教の根本と其の應用（其九）……本多日生
開目鈔講話（第廿七講）……小林一郎
本尊曼陀羅の意義……河合陟明
保健の要點（完結）……池田龍一
開館記念會に臨みて……岩上野田辰直卯英
記事
○本部團報　○福島支部報
○團費誌料寄附金及維持費領收

第四十四年三月號